

安井小太郎『寓燕日記』解題・翻刻

陳 捷

【解題】

本稿は日本思想史、中国思想史研究者である安井小太郎の北京滞在日記『寓燕日記』の自筆稿本に基づく翻刻である。

安井小太郎（安政五年六月十九日〔1858.7.29〕～昭和十三年〔1938〕四月二日）は、字朝康、号朴堂。幕末明治初期の著名な儒者である安井息軒の長女・須磨子と幕末維新の志士である中村貞太郎との間の長男として、江戸麹町三番町にある息軒の家に生まれ、少年時代に外祖父の息軒の影響を受けている。青年時代に東京の島田重礼の双桂精舎および京都の草場塾で漢学を学び、明治十五年（1882）に帝国大学古典科に入学して国学を修める。明治十八年（1885）に学習院助教に任ぜられ、同年に島田重礼の長女琴子と結婚している。その後、学習院教授、第一高等学校教授、東京高等師範学校漢文科教師、大東文化学院教授などを歴任した。家学を継承して着実な漢学の素養を持ちながら、近代的な研究方法をも身につけ、中国思想史、経学史、日本思想史などの分野に関する造詣が深く、著作は生前に出版された『中庸講義』『大学講義』『論語講義』『日本朱子学派学統表』『経学門径』や漢詩集『曳尾集』の他、死後に出版された『日本儒学史』（富山房、1939年4月、服部宇之吉序）、『朴堂遺稿』（東京：安井琴子、1940年4月）などがある。

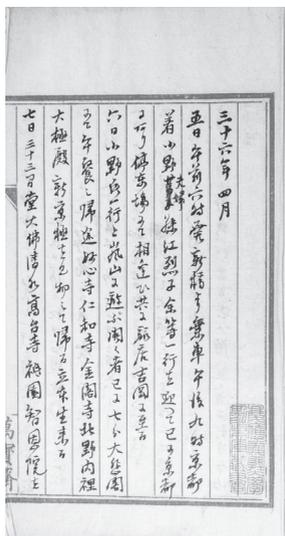
安井小太郎は明治三十五年（1902）、四十五歳の時に中国の京師大学堂訳学館教授に任命され、明治三十六年四月に東京を出発して、同年五月三日に北京

に入り、途中一時的に帰省した時期もあったが、明治三十八年六月まで北京に滞在し、訳学館に勤務していた。今回翻刻した資料『寓燕日記』はその期間において記し続けていた日記である。

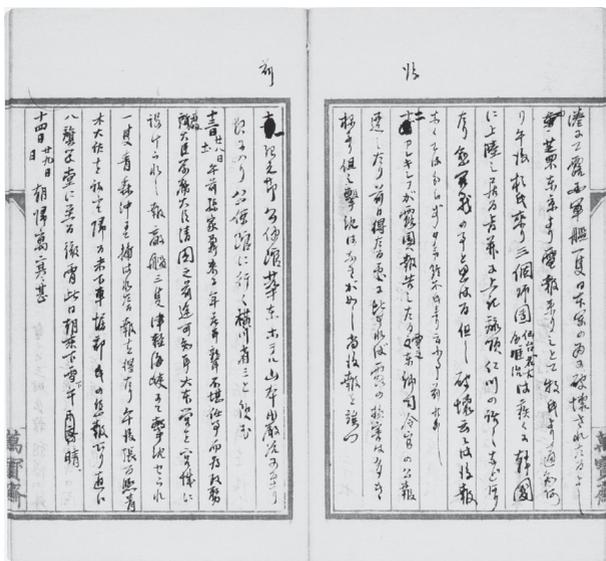
本日記は安井小太郎の自筆稿本であり、現在慶應義塾大学附属研究所斯道文庫安井文庫に所蔵されているもので、袋綴により製本されたノート二冊である。第一冊は表表紙が欠けており、裏表紙は黄地に白色の斑点のある紙(24.0 cm×15.0 cm)が使われている。前後にそれぞれ一葉の薄い遊紙があり、本文は朱色四周双辺(17.6 cm×11.2 cm)、半葉九行の印刷罫紙を使用しており、罫紙の版心は白口で、上に単魚尾、下に横線があり、横線の下には「萬寶齋」と印刷されている。表紙・遊紙を除いて計44枚がある。第二冊の表と裏にはいずれも土色表紙(24.0 cm×15.0 cm)が用いられており、表表紙に安井小太郎の筆跡による「寓燕日記」との墨書が記されている。表紙と前後それぞれ一枚の遊紙を除いて計51葉の朱色印刷罫紙を用いて、四周双辺(16.2 cm×11.4 cm)、半葉九行、罫紙の版心は白口で、上に単魚尾、下に横線があり、横線の下には「文茂祥」と印刷されている。なお、文字が記されている46葉の本文の後に、5葉が未使用のまま残されている。

日記は明治三十六年四月五日に東京の新宿より出発して中国に向かうことから始まり、明治三十八年六月二十五日に終わっている。そのうち、明治三十六年九月と明治三十七年七月に2回、それぞれ一ヶ月ほど帰省しているが、明治三十六年九月十二日に東京に到着してから、再び北京へ向かって出発する十月八日の間および明治三十七年七月十八日に東京に到着してから、再び北京へ向かって出発する八月十八日の間においては、出来事が多すぎて日記をつけなかったようである(「在家数十日、冗細不可記、故皆省記。」)。

日記には、東京から北京到着までの道中の記録、北京滞在中の日常生活、訳学館に通う様子、北京の風俗習慣、北京郊外・山海関・保定などに旅行した際の見聞、家族や友人たちとの通信などが記されている。安井小太郎の中国滞在



図版1 『寓燕日記』巻首



図版2 日露戦争の様子を記す箇所

経験、清国政府高官および訳学館の同僚などの中国人たちとの往来の様子、北京に駐在していた日本人のネットワークや当時の日中間の教育交流と中国社会の状況などを知る上での貴重な記録である。なお、本誌前号に掲載の「服部宇之吉『北馬録』解題・翻刻」で紹介した服部宇之吉は、京師大学堂の総教習として安井小太郎より先に夫人繁子と三人の子供とともに北京にわたっており、同時期到北京に滞在していた。安井夫人の琴子は繁子の姉であり、服部と安井とは親戚関係に当たることもあって、しばしばともに行動していたため、服部とその家族の北京での様子も本日記から伺うことができる。また、安井小太郎の中国滞在中に日露戦争が勃発し、安井小太郎が中国で出会った日本人のなかの数人も戦場に赴き命を失うこととなった。日記にはその前後の風説、報道および北京滞在中の日本人の動向について触れられており、当時の日本人の日露戦争に対する考え方を窺う史料としても重要な価値を有するものであると考えられる。紙幅の関係で今回は簡単な解題と翻刻のみに留めることとし、『寓燕日記』の内容やその価値に関する詳しい論述は別稿に譲ることとした。

【凡例】

- 一、本稿は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に所蔵されている、安井小太郎の自筆稿本である『寓燕日記』第一冊を翻刻したものである。
- 二、翻刻に当たり、判読不能の文字は□で記し、原文の明らかな誤字は原文字に〈〉をつけ、その後の〔〕内に正しい文字を記した。抹消された文字は取り消し線を引いて示してある。また原本に後に埋めるために空白を空けている箇所は◇で記した。なお、罫紙枠の上にある安井の書き込みについては【眉註：】で記した。
- 三、原文は漢字、平仮名に片仮名を交えており、また異体字も多いが、翻刻の際には常用漢字に統一することとした。仮名については原文通りとした。
- 四、原本の日時の記し方は必ずしも一致しないが、翻刻の際には原本通りとし

て特に統一することはしなかった。安井は原則として月の始めに例えば「一月」のように記入しているが、記入がない場合には読者の便宜のため、『六月』のように月名を付記した。

【翻刻】

三十六年四月

五日 午前六時発、新橋より乗車。午後九時京都有着。小野芳子夫婦、藤江烈子、余等一行を迎へて已に京都にあり。停車場にて相逢ひ、共に旅店吉岡に至る。

六日 小野氏一行と嵐山に遊ぶ。開く者已に七分。大悲閣にて午餐し、帰途妙心寺、仁和寺、金閣寺、北野内裡、大極殿、新京極を見物して帰る。立本生来る。

七日 三十三間堂、大仏、清水・高台寺、祇園、智恩院を見物して、平野屋にて午餐し、一行と別れ、草場先生家を訪ふ。夫人不在、直に帰る。此日智恩院門前にて萩野由之氏に逢ふ。帰寓して直に発し、宇治に至り、萬碧楼に投ず。

□□琴子は小野氏一行と黄檗^{バス}に行く。

八日 奈良を見物して、吉野に至り、竹林院に投ず。

九日 雨を冒して寓院を出で大坂に向ふ。午後三時湊町に着く。小野氏一行と別れ北桃谷同族に投ず。

十日 午前、小野氏一行来る。共に博覧会に行き、午後帰寓。

十一日 小野氏を常安町八十川氏に訪ふ。小野氏已に出づ、乃ち琴子と市内を散歩して、午後五時頃文楽座に至る。小野一行亦在り、相携へて浪花橋下の川魚料理に至り別を叙す。

十二日 小野氏一行と堺に遊ぶ。途中学習院諸氏と逢ふ。難波にて小野一行と別れ、博覧会に行く。夜景を見ん為なり。小野氏は余が清国行を送らんとて妻女を携へて尾道より来りしなり。厚意謝するに餘あり。博覧会庭中にて加藤三

重視学、佐野子、松平子に逢ふ。又日野伯に逢ふ。夜景極めて美麗なり。新斎橋に出で、毛布を買って帰る。途中寒し。【眉註：南宗寺、大安寺、松の寺、妙国寺、住吉を見物して、堺町の角の蕎麦屋にのりソバを食ふ。】

十三日 午後売店に至り、土産物を買ふ。

十四日 神戸に向ふ。璞、静子送り至る。大連丸十五日発の処、十七日となる。因て舞子に行く。膳鉦次郎氏来る。午後四時舞子旅店に投ず（松菊楼）。

十五日 璞、静子帰る。此日雨。

十六日 又雨。午後神戸に帰る。大連十九日に延ぶ。膳氏を訪ふてその案内にて諏訪山常盤に投ず。

十七日 須広一の谷に遊び帰寓。

十八日 璞及び静清子来る。余を見送らん為なり。親族の情は格別と思へり。午後四時乗船。妻琴、五郎、吉、璞、清子は六時の汽車で一は大坂へ、一は東京へ帰るなり。大連は十九日の午前五時上碇の筈なるを以て此にて別れたるなり。琴、五郎、吉は東京より余を送り来りしなり。

十五九日 午前五時発上碇。内海の風景実に好し。

二十日 午前零時門司着。馬関を見物す。亀山神社の社内にて午餐す。静にて好き処なりし。午後三時発。博多沖より動揺甚し。平戸を過ぎて更に甚し。

二十一日 午前六時長崎着。諸所見物せり、諏訪山殊によろし。午後五時発。此夜も動揺せり。

二十二日 午前五時釜山着。午後六時発。風強し。

二十三日 洋中又在り。

二十四日 午前十時仁川着。風強し、午後二時、飯泉幹太迎の為に来れり、因て上陸。飯泉氏と其家に至る。家は永登浦に在り。

二十五日 京城見物、花月にて午餐し、午後永登浦に帰る。

二十六日 帰船。午前十時発。

二十七日 午前六時芝罘着。上陸、天津棧にて午餐して帰船。午後六時発。

二十八日 午前六時ダルー着。

二十九日 午後六時発。

三十日 午前四時旅順外港着。午後一時内港に入る。

五月一日 午後七時発。

二日 午前十時太沽着。午後一時小蒸汽にて塘沽に向ふ。四時着。伊太利亜旅店に泊す。大連船長加藤氏、事務員長戸沢氏には最も世話になれり。

三日 塘沽より汽車に乗り、北京に向ふ。北京停車場にて服部夫妻出迎居られ、直に其寓に至る。家を出でてより二十九日を費し、始めて北京に入れり。

四日 大学堂に行き、張、姚二氏と会晤す。帰途公使館に内田公使を訪ふ。来客にて面会する能はず。

五日 隆福寺に遊ぶ。

六日

七日 内田公使、鍋倉氏を訪ふ。始めて前門市街に至る。

尅八日 隣家を借り、修繕費二十元を与ふ。

九日

十日 順親王主人を訪ふ。余亦迎接す。午後大学に至り、張氏に逢ふ。

十一日 大学に行く。

十二日 山根氏を訪ふ。

十三日 四十元を隣家主人に与ふ。呉氏来る。語学教師なり。

十四日

十五日 大学に行き、条約書に捺印す。

十六日

十七日 工芸局に至る。諸道具を買はん為なり。

十八日 博啓来る。語学教師なり。

十九日 大学諸氏、呉汝綸の追悼会を陶然亭に開く。余亦行く。帰途萬柳堂に

行く。大風。

二十日 大学諸氏、余を華東旅館に招く。夜に入り帰寓、亦大風。

二十一日

二十二日 午後俄に冷氣となる。

二十三日 前門に至る。帰途雨に逢ふ。

二十四日 成賢街の大成殿に行く。午後山根少将、山本中佐来訪。

二十五日

二十六日

二十七日 転寓。

二十八日 旅費、俸給等を受取る。

二十九日 正金銀行に行く。訳学館朱氏来る。

三十日 鍋倉氏を訪ふ。

三十一日 隣家主人紹榮、榮勲を招く。余亦共に飲む。

六月

月 一日 紹榮其祖父馬佳氏の詩集を贈る。

火 二日 午後、訳学館に至る。

水 三日 熱甚。

木 四日 午後大風。支那人も近年稀なる風と云へり。

金 五日

土 六日 書肆宝華堂『通志常堂経解』を持参す。価百四十元なり。『皇清経解』正統と合せて二百六十元。五ヶ月にて払ふ約束にて買ひ、六十元お渡せり。

日 七日 脇光三氏隣室に来る。

月 八日 午前前門に至る。午後大学より明日張之洞来るに付、参校すべき旨の案内あり。

火 九日 午前七時大学に行く。間もなく張氏来る。六十六とか云ふ事なるが、少し老衰の容子なり。一揖の後、共に教場を参観せり。午前は巖谷君の教場なり。午餐を共にせり（但し食卓は別なり）。午後服部、杉、太田三君の教場を参観せり。午後四時頃帰寓。夜根本門人沖氏と会晤す。北京にて私立学校に従事せる人なり。午後二時戸部失火、夜に入り滅す。

水 十日^{十五} 家書数通及衣服を得たり。絢子送る所のバラ香散色褪すといへども、心情愛すべし。星倉一徳死去のよし。亦家書中にあり。気の毒な事なり。学習院より後職の辞令達す。故友の厚誼謝するに餘りあり。答書十餘通を作り、極めて多忙なりし^{家賃を}私^を払ふ。

木 十一日^{十六} 訪張之洞。亦大風。ボーイに本月分二元を払ふ。本月分賃料三元は^{〇〇〇〇〇}内金なり。

金 十二日^{十七} 午後大学に至り。張氏と辞書編纂の事を議す。

土 十三日^{十八}

日 十四日^{十九} 午前八時出門。佐伯、堀部二氏を八旗学堂に訪ふ。転して太田氏を西交民巷に訪ひて帰る。

月 十五日^{二十} 大風。

火 十六日^{二十一} 張之洞、張百熙、栄慶以下十三人を華東旅館に招き、写真を取り、午餐を共にす。主人は邦人の外に、魯人伊鳳閣なり。大に暑がりし。

水 十七日^{二十二} 鈴木信太郎^{文学士}、宅野潔来る。

木 十八日^{二十三} 午下稍冷。

金 十九日^{二十四} 小村、田中、落合、塩谷へ手紙を出す。八旗学堂を参看し、帰途徳昌に行き、買物して、便路牧氏を訪ふて帰る。

土 二十日^{二十五} 暁来下雨、微涼可人。昨日佐伯宅にて内閣侍講興亮に逢ふ。試に一二を叩けば無学の人なり。其先は蒙人なるよし。談話中琉球を清国所属の如く思ひ居れるが、官吏としては不似合なり。終日雨冷秋の如し。夜に入りても止まず。

日 二十一日_{二十六} 昨日の雨猶止まず、地に入る寸餘。昨日内田公使、服氏を訪ひ。談東三省一条に及び清国宮廷に露国の勢力近、盛んなるよし云ひ居たりとなり、今のヤリ方では其筈なり。然し露の申込み通らば、戦争は免かれじ。

月 二十二日_{二十七} 曇。昨日午下杉、太田、佐伯三氏来る。呉氏告げて曰く、明日河間に帰へり、来月五日又来らんと。夜鈴木信太郎来る。

火 二十三日_{二十八} 昨日月俸、屋賃を受取る東京へ為替を出す。猶陰。

水 二十四日_{二十九} 又陰。朝宝華堂書籍代三円を払ふ。八時出寓、大学に往く。帰途服氏と隆福寺に至る。午下晴。博氏に月謝十二円贈る。一ヶ月八元の割なれど、先月半月分未済に付、今月贈る。

木 二十五日_{一日} 家書数通を得たり。猶陰。

金 二十六日_{四日} 又陰。外弟翰氏渡航に付、其迎として塘沽に行く道、冷寒を覚ふ。午後七時着。華信洋行に投ず。

土 二十七日_{五日} 晴。食後散歩。午後三時翰及高橋氏着。家信を得たり。

日 二十八日_{六日} 午前六時五十分塘沽発帰寓。

月 二十九日_{七日} 午後張氏と会見の筈なりしも、同氏差支ありて延期す。

火 三十日_{八日} 陰。華東旅館払を切手にて巖谷君に渡す。塘沽にて北京山海関汽車賃表を得たれば、此に追記す。

自北京	到塘沽	到山海関
一等	六、九〇	一五、七〇
二等	四、三〇	九、八〇

山海関には邦人登本^{トモト}萬吉と云ふ者旅店を開き居るよし。又山海関行列車には食堂あり、邦人のボーイも食堂車に乗り込居る旨、華信洋行での話なり。二三日以来日露開戦の内廟議決定せりとの風聞高し。

水一七月一日_{七日} 昨日 午後大学堂日本教授諸氏来り、学校に関する協議会を開けり。両大臣張之洞三人上諭を奉じて、学政を審議する事となりたるを以て、其参考に供せんためなり。食後散会せり。夕刻降雨。

水 七月一日_{七日} 午下大学に往き、書籍買入等の事を議す。降雨、雷鳴、少時にして止む。

木 七月二日_{八日} 翰、高橋二氏と琉璃廠に行く。午後、大学堂助教授諸氏の招飲案内あり。

金 三日_{九日} 昨日ボーイに金二元を与ふ。午前田中文求堂来る。云ふ大沽より上海に赴く船賃一等五十兩、二等二十兩_{支那人等}、上海日本人旅店一日二円五十錢なりと。

土 四日_{十日} 午後四時より大学堂助教授諸氏の招宴に赴く。場は餘園になり。城内にある支那料理では第一と云ふ。然し家屋庭苑共に観るに足るものなし。

日 五日_{十一日} 張之洞を其寓に訪ふ。会談移刻、午後二時帰寓。

月 六日 東京の諸新聞来る。去月廿二日五元老総理海相外相御前に於て何か凝議ありの旨見由。此により『時事』、『中央』、『二六』等は日々号外を出して日露開戦の事に付報道し居るよし。家信に見由。満州問題に対する清廷の態度何如によりては開戦は必ず無しとも云へず、_{田田}又此よりして瓜分の禍を見ずとも限らず、何分清廷の当局者が_{田田田田田}目先の見へぬには困るなり。天津より塩谷の手紙来る。

火 七日_{十三日} 英に給金の内二元を与ふ。病氣にて代人を立て一時帰る。全快の上は又来るよしなり。温氏明日来るよし。手紙来る。高橋氏大学へ転寓す。今日より暑中休業となる。

水 八日_{十四日} 支那尺に高香尺、裁衣尺、营造尺の三種ありて高香尺大、次裁衣尺、次营造尺なるよし。博氏語り。其差の詳なる事は同人も知らぬよしなり。高香とは仏に供する香の名にて、通例貧者は線香を用い、富者は高香を用らる事よし。尺の長さ高香と同じきを以て、其の名ありと。是も同人の話なり。塩谷氏出迎として停車場に行き、徳興堂に案内して帰る。屋賃を払ふ。

木 九日_{十五日} 塩谷氏来る。憲兵某、佐伯・堀部二氏来る。大に熱し。渡辺良

氏の信を得たり。

金 十日_{十五六日} 正金銀行より金十元受取る。明日立神丸出帆に付書信五通を發す。亦熱。夜川田醫師来る。曰く、今日室内九十四度、室外百二十度に昇ると。さもあらん。九時頃より東風徐に吹き、涼味可掬。十六夜の月高く上り、南東城角の角楼模糊として聳半空に聳へ、一声の胡角もがなと思われたり。

土 十一日_{十七日} 薄陰稍涼。午後に至り大熱。塩谷、鈴木二氏、服氏に招かる。余亦之にあづかる。夜南風。

日 十二日_{十八日} 陰、朝微雨。昨日杉、林二氏来る。午前出寓、巖十三日谷君を訪ふ。宅を尋ねれども得ず、転して清語同学会開校式に行く。邦人会するもの六七十名。式終わり、写真して帰る。

十三日_{月十九}

十四日_{火二十} 家書二通、石井・小野二氏の信を得たり。雨大に至り、涼味可掬。

十五日_{木三十一日} 書記官中島氏帰朝、本日発軻。三浦安氏への書を托せんとして、人を走らしたるか、已に不及。乃又至留守宅、市村、石幡へ手紙を出す。微陰尚涼。

十六日_{木三十二日} 九時半出寓。張百熙氏を訪ふ。大熱。夜、螢を見る。

十七日_{金三十三日} 塩谷温氏来る。亦熱。

十八日_{土三十四日} 午下、雨大至。夜涼。

十九日_{日三十五日} 杉氏を灯市口を訪ふ。其朝鮮に遊ぶを以てなり。

二十日_{月三十六} 終日頭疼したり。大熱。

二十一日_{火三十七} 大学に如き、榮慶と相見る。大熱。俸給を受取る。

二十二日_{水三十八日} 稍涼。為替を出す。始て氷を買ふ。後以て常となす。

二十三日_{木三十九日} 宝華堂に五十元払ふ。午後雷鳴あり。暴雨大に至る。

二十四日_{金六月一日} 家書及信他書数通ヲ得たり。

二十五日_{土二日} 塩谷氏を西交民巷を訪ふ。衣服小包を得たり。

二十六日_{日三日} 天津『大公報』来る。

二十七日^{四日}_月

三十八日^{三日}_月—^一_火

二十八日^{五日}_月 卷田軍医、窪田試補の送別会を餘園に開く。席上瓜生氏の来りしを聞く。

二十九日^{六日}_月 午前瓜生氏を公使館に訪ふ。不在。

三十日^{七日}_月 午後六時瓜生氏一行の歓迎会を餘園に開く。盛会なりし。『孝経徴文』『尚書餘論』読了。

三十一日^{八日}_月 午前六時停車場に行き、卷田、瓜生氏一行を送る。長門丸二十九日入港すべきに今に不着、何故なるか不審。朝来微下雨、至夜晴。

八月一日^{九日}_月 会読『古文苑』載石鼓文字、存者都七百〇二、内存者六百三十八、欠蝕者六十六。『粹編』曰、「欧陽氏所見四百六十五字、趙夔所見四百一十七字、胡世将所見四百七十四字、薛尚功所見四百五十一字、潘迪所見三百八十六字、孫巨源所見四百九十七字、吾邱衍所見三百八十六時四百三十餘字、馬縡所見三百二十字、高士奇所見三百二十五字、牛運震所見三百二十二字、吳玉搢所見三百十餘字、張養浩詩則以為僅餘二百七十二字。惟都穆得見宋拓本、有四百二十二字。天一閣所藏北宋拓本最為完備、然亦止四百六十二字」云々。至夜雨晴。午下内田公使ノ招筵に赴く。此日書^日買携桂馥書一聯而来、価四十元。以過貴返之不買。

二日^{十日}_月 甚熱。昨日長門丸載する処の信書数通を得たり。『大公報』煙台暴雨あり。被害甚しく、死者六百餘人ありしよしを記す。之を以て着港後れたるならん。

三日^{十一日}_月 博氏に聞く、秀才拳人之例は『順天府則例』に拠りて知るべく、進士の例は『礼部則例』に拠て知るべしと。又『八旗官学則例』あり、旗族科挙の事を記すよし。又曰、童兒読む所の書『三字経』、『百家姓』、『名賢集』、『六言雑字』、『龍文鞭影』等なり。然共一定せずと。『六言雑字』は商家子弟の読む所なり。大熱、至夜不散。

四日^{十二日}_月 陰。午後晴、又大熱。薄暮塩谷氏来。夜月明如昼。遊城壁、捕

ハリネズミ

蝟。此日『白虎通疏證』読了。

五日^{十三日}_水 又熱、然不似前日之甚。岡本氏来曰、經朝鮮而来。京城比北京稍爽涼。叩以満事、則曰無一所聞云々。夜冷、月帶薄暈、雨微也。

六日^{十四日}_木 雨、微涼。購『遺山集』。得家信。

七日^{十五日}_金 又雨、然熱蒸難堪。午後至訳学館訪朱氏、不在。帰途訪徳興堂田中、以其明日帰朝也。

八日^{十六日}_土 陰 涼 午後散策近街、至崇文門。試量城壁之厚、得日本曲尺六十九尺八寸七分（即十一間三尺八寸七分也）。聞団匪之乱、我軍以野砲擊之、不能少壞、宜矣。

九日^{十七日}_日 立秋、爽涼。夜遊城壁、月光如昼。壁上秋草没徑、有郊野之趣。前路有数人背月而取草。清人不夜遊、余然衣服不似西人。及近、則一婦人の声として、こゝにも沢山あります云々。始知為邦人。邦人遊好夜遊、而夏夜尤甚。況於此月明乎。曰居久々而過涼不堪久居、十時帰寓。『頑石廬経説』読了。間有卓説。

十日^{十八日}_月 『求古録』『礼説』読了。足資參読。

十一日^{十九日}_火 陰、又涼。午後遊隆福寺、購花卉数株而帰。

十二日^{二十日}_水 服氏郷人河原橘弥氏来着、服氏招山根氏介之、余亦与焉。縦談至夜半。河原氏陸軍中尉也。云以私費留学云。及出、則二十日之月高掛城楼矣。

十三日^{二十一日}_木 午後、岡本氏来。

十四日^{二十二日}_金

十五日^{二十三日}_土 得家書三通及山井、市村、瀧川三氏之書。

十六日^{二十四日}_日 味爽出門、歩城壁。遊東嶽廟、廟内瀟洒可人。少憩而去。午後赴正金銀行之招筵、邦人則唯服氏与余二人也。他則崇文門主稅諸氏也。榮勲、紹榮亦在焉。紹榮曰、崇文門稅率從其個各課十之三云々。案此説不可信。

十七日^{二十五日}_月 朝下痢、一行頓覺疲労。乃擁衾而臥。上田三徳氏氏（名三徳）来。

十八日^{二十六日}_火 稍熱。午下山根武亮氏招飲、十一時帰寓。

十九日^{二十七日}_{陰水} 陰。杉氏自朝鮮回、致飯泉所托之写真数葉。

二十日^{二十八日}_未 朝雷雨。開校に付、雨を冒して大学に如く。雨益強く。北京にて稀有の雨なるよし。午後四時華東旅館に如く、于氏の招に応ずるなり。会者二十餘人。九時帰寓。本日月俸受取る。

二十一日^{二十九日}_{未金} 晴。宝華堂来、与書価五十六元。

二十二日^{三十日}_未 晴。与服氏遊前門外、到榮祿堂買支那尺而归。

二十三日^{七月一日}_未 発家書。

二十五日^{二日}_未 訳学館入学試験の為、午前六時出寓。午後四時帰。夜服氏上田、岡本、杉三氏を招飲す。余亦与焉。

二十六日^{三日}_未 八時、大学に行く。閱卷の為なり。答案を出すもの三十八人。帰後若杉宅。弘物の器物を見る。

二十七日^{四日}_未 書估趙平甫来。自言識市村器堂、現住琉璃廠文昌館館山堂。所携『魯公集』^{六本}十元六本^{十元}_{明板}、『錢注杜詩』八本^{十元}、『武溪集』六本^{三十元}_{明板}、『王文恪集』四本^{十元}。

二十八日^{五日}_未 約塩谷、鈴木二氏拜文廟、便路觀雍和宮。午後二時帰、翰氏同行。

二十九日^{六日}_未 岡本、林二氏来、誘翰氏而去。

三十日^{七日}_未 昨日書估趙来、『錢注杜詩』を八元にまけろと云ひしが応せず、宋板覆刻の『駱賓王呂元賓集合刻』は四本にて三十円と云ひ居れり。又醇親王、翁方綱の蔵書印ある『杜詩千家注』ありしが蔵書印には用なしと云ひたれば、笑ふて居たり。^{追記}今日上田三徳氏帰国に付、見送りとして翰氏は早く出たり。

三十一日^{八日}_未 食前城壁に上り、朝顔数株抜きて帰へり。食後田中氏を伴ひて前門外に如き、買物して帰る。某夫人の葬儀を見る。盛んなる事、目を驚かせり。午後雨。

物売りの声もいつしか聞なれて古里人の心地こそすれ
朝顔の名を那つかしみ立寄れば抜きとる袖に露ぞこぼるゝ
武さし野の月詠めつつ今宵もや語り出づらん唐土の原
朝かすみ鈴の音高し驢馬二匹
大行のふもとすそまで青し芦の風
見渡せば雲程万里むら時雨
驢馬駱駝我は異国に來りけり

三十一日^{九月} 覆試の為、大学に如く。午後家信数通を得たり、外に谷、石井、時任等の書もあり。

九月

一日^{八月} 家書を出す。脇光三、上野政則來る。上野宮崎町の人なり。

二日^{八月} 雨。牧氏より服氏へ贈れる朝顔美事に咲けぬるを見て
古里の心地もぞする朝顔の露だに厭ふ花のけしきに
心なき草木ながらに朝顔のかはらぬ姿見るぞうれしき
朝顔をみるにつけても思ひ出づ宿のまがきの露やいかにと
朝顔や百萬斤の露ひとつ
午後杉氏を訪ふ。閑談少時にして去る。

三日^{八月} 陰。家信を得たり。午後晴。

四日^{八月} 訳学館朱氏を寓宅に訪ひ、帰朝の事を語る。

五日^{八月} 買物に行く。

六日^{八月} 七時の汽車にて塘沽に行き、午後四時芝罘丸に乗る。五時発、平静。

七日^{八月} 午前七時芝罘着、上陸。玉皇寺に遊ぶ。

八日^{八月} 十一時発。

九日^{八月} 全羅道の沖にて天明夜に入る。

十日^{八月} 午後四時門司馬関上陸、川卯投宿。

十一日^{二十日}_金 午前六時馬関発、午後四時神戸着。

十二日^{廿一日}_土 午前九時新橋着。

在家数十日、冗細不可記、故皆省記。

十月八日 又向北京。興津東海樓投宿。

九日 大野氏ヲ訪ふ。夫人れん氏と舟を浮べて三保に遊ぶ。

十日 内と別れ、静岡に向ふ。此にて急行車に乗り代へ、夜十時神戸後藤に投宿。

十一日 大坂北桃谷に投ず。

十二日 村岡来る。午後濱寺に遊ぶ。

十三日 北桃谷を辞し、尾の道に向ふ。夜九時着。小野氏に投ず。

十四日 海に浮ぶ。藤江逸志来る。

十五日 又海に浮ぶ。夜八時乗車、馬関に向ふ。

十六日 馬関着、長門丸乗船、午後三時上碇。

十七日 朝鮮沖にあり。

十八日 黃海^日あり。山東角に達す。

十九日 出東角太沽に達す。

二十日 太沽にあり。午後三四時塘沽上陸。

二十一日 北京に入る。夜小村俊来る。此日清曆九月朔二日なり。

二十二日^{三日}_木 田中逸平帰東。大学訳学館に如く。

二十三日^{四日}_金 内田氏、山根氏、成富、小村、鄭諸氏を訪ふ。正金に至り為替を託す。高橋氏と前門外に遊ぶ。正金に為替を託す。

二十五日^{五日}_土 内田、小村、山根、成富、鄭、島川諸氏を訪ふ。正金午後山根氏来る。書估ニ五十元払フ。

二十六日^{六日}_日 玉泉山に遊ぶ。午下降雨、大に難義せり。鄭氏及呉葆誠、楊寿桐二氏来りしが、不在不面。

- 二十七日^{七月} 午後東单牌楼散歩。日露交渉不調と新聞あり。
- 二十八日^{八月} 金氏始来教。杉氏来。
- 二十九日^{八月} 午後大学に如き、帰途杉氏の招飲に赴く。
- 三十日^{八月} 村岡を携へて隆福寺に遊ぶ。
- 三十一日^{八月} 訳学館開学。
- 三十一日^{十二月} 訳学館に如き、学生の班次を定む。羅良鑑と相見る。帰後、羊尾巴胡同の賃屋を見に行く。此日天気清和、寒暖計六十度に昇る。

十一月

- 一日^{十月} 午後、大江卓氏歓迎会に行く。
- 二日^{十月} 訳学館始業。
- 三日^{十月} 天長節に付休学。公使館、兵營に往き、午後七時より再び公使館に往き、十時帰寓。
- 四日^{十月} 増祺の露人に捕はれし風聞盛んなり。
- 五日^{十月}
- 六日^{十月} 午後六時より、駐屯軍送迎会に往く。此日那桐外務部尚書となり。榮慶軍機処大臣となり、張百熙政務処大臣となりし事発表さる。増祺の捕はれしは事実なる事知れたり。
- 七日^{十月} 午後一時より軍隊見送りとして停車場に往き、ソレより榮慶、張百熙を訪ふ。
- 八日^{十月} 午前琉璃廠に往き、午後隆福寺に遊び、菊花二十株を買ふて帰る。
- 九日^{十月} 大風。
- 十日^{十月} 佐藤氏、服氏を訪ふて、『淳化法帖』を示さる。余亦一見せり。
- 十一日^{十月} 午後德昌号に往き、買物して帰る。天気よし。
- 十二日^{十月} 今日菜市口に死刑二十餘人あるよしにて、村岡、英七時頃行きたり。村岡夕方帰る。往来に一人宛呼出し、両手を縛り、跪カシテ、前に伏セシ

め幅二寸長二尺信計りの刀を以て頸を斬るよし。西洋人の中には写真器を持参し、形状を写し居りし者許多なりしと。又群聚中より縛せられし支那人二名ありしと。

十五日^{廿五日}_{未金}

十四日^{廿六日}_土 得十月三十一日、十一月四日家書。

十五日^{廿七日}_日 諸氏と東嶽廟、回々寺、日壇に遊ぶ。

十六日^{廿八日}_月 俸給を受取る。

十七日^{廿九日}_火 二百七十元を為替す。銀貨少しく下落。

十八日^{三十日}_水

十九日^{十一月一日}_木 英二九月分給金を与ふ。

二十日^{十一月二日}_金

三十一日^{三十日}_土

二十一日^{三十日}_土 家書小包ヲ得タリ。

二十二日^{四日}_日

二十三日^{五日}_月 小村氏を訪ふ。雪ふる。昨夜より今日夕方まで。

二十四日^{六日}_火

二十五日^{七日}_水 家書を得。

二十六日^{八日}_木

二十七日^{九日}_金 隆福寺に遊ぶ。

二十八日^{十日}_土 万寿節に付休業。佐伯氏来ル。英に四元与ふ。

二十九日^{十一日}_日 毛皮を買ふ。伊東家に贈らん為なり。二十六元。

三十日^{十二日}_月 小村氏来ル。

十二月

一日^{十三日}_火 毛皮を公使館に持す。

二日^{十四日}_水 寒気甚し。午前五時室外にて測るに十七度なり。

三日 ^{十五日} _木	亦寒。	十八度
四日 ^{十六日} _金	亦寒。	二十度
五日 ^{十七日} _土	稍暖。東京、飢肥に手紙を出す。	二十度
六日 ^{十八日} _日	天壇に遊ぶ。	二十一度
七日 ^{十九日} _月		二十四度
八日 ^{二十日} _火	夜牧氏の招飲に赴く。	二十八度
九日 ^{二十一日} _水	午後服氏と琉璃廠に遊ぶ。	二十八度
十日 ^{二十二日} _木	夜沖楨介来る。	二十七度
十一日 ^{二十三日} _金	午後山根氏を訪ふ。	二十四度
十二日 ^{二十四日} _土	午後杉氏山根氏招飲。	二十四度
十三日 ^{二十五日} _日	到国子監、与楊鳳藻氏相見、巡覽一次。去赴八旗警務学堂山根氏送別会、午後二時去、鼓楼を見物して帰る。	三十度
十四日 ^{二十六日} _月	雪、少時にして止む。	二十八度
十五日 ^{二十七日} _火	風あり、稍寒。	二十七度
十六日 ^{二十八日} _水	稍寒。家書、小包を得たり。	十八度
十七日 ^{二十九日} _木	大学ニ如キ、金ヲ受取ル。	十八度
十八日 ^{三十日} _金	為替を出す。	十八度
十九日 ^{十一月一日} _土	山根少將見送りトシテ停車場に至りしが、間ニ合ハズ。試験アリ。家書を得たり。寒。	二十度
二十日 ^{二日} _日	学生張来る。	十七度
二十一日 ^{三日} _月	大学に如き、高橋氏を訪ふ。	十八度
二十二日 ^{四日} _火	家書を得たり。	二十度
二十三日 ^{五日} _水	冬至。	二十四度
二十四日 ^{六日} _木	漢碑を買ふ。	二十度
二十五日 ^{七日} _金		十八度
二十六日 ^{八日} _土	留学生の送別会に赴く。	十九度

二十七日 ^{九日} _日	午前李盛鐸を訪ひ、午後隆福寺に遊ぶ。	十九度
二十八日 ^{十日} _日	年始状三百餘通を出す。	二十度
二十九日 ^{十一日} _日	『図書集成』を購ふ。三百元なり。	二十一度
三十日 ^{十二日} _日		十八度
三十一日 ^{十三日} _日	夜かるた会あり、十二時就床。此日より学校を休む。	二十度

三十七年一月

一日 ^{十四日} _金	公使館日本人会に如く。	十八度
二日 ^{十五日} _土	兵営より諸処へ年始に如く。	十八度
三日 ^{十六日} _日	又年始に如く。小村氏と写真す。	二十度
四日 ^{十七日} _日	東交、文明の二校に如き、前門外を散歩して帰る。	十度
五日 ^{十八日} _日	午後佐伯、堀部二君と前門外に如く。	
六日 ^{十九日} _日	訳学館に如く。以下不記。	十八度
七日 ^{二十日} _日		十度
八日 ^{二十一日} _日	傷風不出。	十度
九日 ^{二十二日} _日	傷風不出。川田医来。	十度
日 十日 ^{二十三日} _日	近衛公追悼会、未愈。	十六度
月 十一日 ^{二十四日} _日	終日不出。近衛訳学に如く。此夜坂西氏送別会あり。不出。	二十四度
火 十二日 ^{二十五日} _日	訳学館にて写真。	二十四度
水 十三日 ^{二十六日} _日	訳学館にて写真。	二十四度
十四日 ^{二十七日} _日	『北支那新聞』に露国回答なりとて載する所あり。満韓交換の不完全なるものなり。今日露国の元日に付、後門外に伊氏を訪ふ。転して鈴木氏を訪ふ。不在。	二十一度
十五日 ^{二十八日} _日		二十一度
十六日 ^{二十九日} _日	発句会に往く。	二十四度

十七日 _{二日}	駐津露兵引揚げたるよしの新聞あり。	十八度
十八日 _{二月}		十七度
十九日 _{三日}	時局切迫の風説盛んなり。	十八度
二十日 _{四日}	長門不來との風説あり。	二十度
廿一日 _{五日}	家書を得たり。	十六度
廿二日 _{六日}	日本人会に三十元を寄付す。	十二度
廿三日 _{七日}	家書を得たり。巖谷氏来る。	十二度
廿四日 _{八日}	午後支那研究会に如く。石井八萬次郎氏の支那地質談、吉原四郎氏の蒙古談あり。	十八度
廿五日 _{九日}		
廿六日 _{十日}		十六度
廿七日 _{十一日}	考試あり。一月十七日まで休業。	十六度
廿八日 _{十二日}	夜雪。月俸受取。	十八度
廿九日 _{十三日}	雪は止みたれど、尚陰。為替を出す。	二十八度
三十日 _{十四日}	尚陰。孝明天皇祭。	二十四度
三十一日 _{十五日}	堀部氏と前門外に如き、看戲。	二十一度

二月

一日 _{十六日}	長門丸來りしる筈との電報ありしよしに付、家書を認め、又写真帖、写真等を送るを手筈になし置く。	
二日 _{十七日}	家書を出す。郷信数通を得、小包にて茶来る。	
三日 _{十八日}		二十七
四日 _{十九日}	長門丸天津 _津 太沽発との報あり。	二十四
五日 _{二十日}	湯山に如く。北京より五里計りの地なり。	二十四
六日 _{二十一日}	薄暮湯山より帰る。	二十八
七日 _{二十二日}	長門丸	二十九

八日^{二十三}_月 李盛鐸、訳学館、太田氏を訪ふ。長門丸芝罘に留り、山東丸芝罘より帰航の旨新聞にあり。 二十三

九日 長門丸無事門司に着したる旨並に山東丸は仁川に向ひしなる旨新聞にあり。満州にある電線は不残馬賊の為に切断されたるよし、電報着せり。

二十三度

九日^{三十四}_月

十日^{三十四}_月 【眉註：二十四度】今朝四時旅順口露戦艦二隻装甲巡洋艦一隻日本水雷艇の為に破壊される。仁舟川港にて露国軍艦一隻日本軍の為に破壊されたるよし。芝罘東京より電報来りしとて、牧氏より通知あり。午後杉氏来り。三個師団<sup>仙台、名古屋、
姫(治) [路]</sup>は疾くに韓国に上陸し居る旨、並に上記旅順、仁川の話しなどありたり。愈開戦の事と思はる。但し破壊云々は後報なくては分らず。夕方鈴木氏来り、云ふ事前の如し。

十一二日 【眉註：後】アレキシフが露国へ報告したる文電文、東郷司令官の公報達したり。前日得たる処に比すれば、露の損害は多き様なり。但し撃沈はなきが如し。尚後報を俟つ。

十三日 【眉註：前】紀元節。公使館、華東ホテル、山本、巖谷に至り。夜に入り公使館に行く。横川省三と飲む。

十三日^{十八日}_月 午前孫家鼐来る。年老耳聾、不堪任事而為政務所処大臣、学務大臣、清国之前途可知耳。大本營を宮城に設けられし報、敵艦三隻津軽海峡にて撃沈せられ、一隻青森沖にて捕はれたる報を得たり。午後張百熙、青木大佐を訪ふて帰る。未下車、堀部氏の悲報あり、直に八旗学堂に至る。徹〈霄〉〔宵〕。此日朝来下雪。下午丹高晴。

十四日^{廿九日}_月 朝帰寓、寒甚。

十五日^{三十日}_月 午後前八旗学堂に至り会葬。三時出棺、朝陽門外日本帝国共同墓地にて火葬。帰途通信員諸氏の開戦祝賀会に赴き、山根某氏の遼陽談、松大島某氏の庫倫談並に沙漠旅行談あり。山根氏は一昨日引上げ、北京に着したる

人なり。

十六日^{正月元日}_火 午後小村氏を公使館に訪ひ、晩飯後帰寓。青森沖三隻撃沈云々、今に公報なし。

十七日^{二日}_水 廻礼の為諸処訪問。佐伯氏を訪ひ、薄暮帰寓。

十八日^{三日}_木 廻礼の為諸処訪問、午前にてすみたり。脇光三氏出発の為服氏を訪へり、共に晩食。

十九日^{四日}_金 昨日家書二通、山城氏の手紙届く。新聞も同じく届く。十八日東京発の公報あり、曰、去十四日日本水雷駆逐艦二隻旅順に入り、敵の三艦を撃ち、其一艦を沈めたり云々。前門外に往き、火神廟、財神廟の縁日を見る。

二十日^{五日}_土 昨日夕方帰寓。小村の手紙あり。云、井戸川と会食せん云々。至れば同人牧に往きしよしにて、更に他日を期し、食後帰寓。旅順阿氏の報によれば、露艦の破損せしもの七隻と外に一隻なり。

二十一日^{六日}_土 午後堀部氏の墓参に如く。西北風にて沙塵天を卷くき、十歩人を見ず。夜同人の法事あり。

二十二日^{七日}_日 家書を得たり。二月九日の書に係る。午後岡本氏来る。

二十三日^{八日}_月 午前張亨嘉氏、小村、岡本三氏を訪ふて帰る。張緝光来る。

二十四日^{九日}_火 巖谷氏を訪ひ、午後六時公使館にて井戸川と会食。千歳、松島、高千穂沈没の風説『北支那』にあり。

二十五日^{十日}_水 岡本氏を訪ひ、山本にて井戸川、小村と写真して、杉氏を訪ひ、共に前門外に遊ぶ。又杉氏に至り、夜八時帰寓。三艦沈没の事は無根なりと確報ありたりと井戸川の話なりし。学生胡^日_日来る。

二十六日^{十一日}_木 学生胡^日_日来る。保定松平来る。

二十七日^{十二日}_金 保定松平来る。

二十八日^{十三日}_土 学生胡^日_日来る。訳学館朱来る。

二十七日^{十三日}_土 堀部氏の祭を八旗学堂に行ふ。故に之に赴く。帰途岡本氏を訪ふ。胡宗瀛氏来り、李氏の語を伝ふ。曰く、明日又明後日琉璃廠に赴かん

云々。日韓定約の報を得たり又兩國斥候兵平安道肅川にて相逢の報あり。

二十八日^{十三日}_日 岡本氏来る。明日十三陵見物の事を議す。

二十九日^{十四日}_月 湯山泊。北京ヨリ五十里。

二十九^{十五日}_火三十日

三月一日^{十五日}_火 昌平十三陵を経て南口井児店泊。昌平の桃園居中食。湯山昌平二十五里。昌平^{二十里}、十三陵^{三十里}、南口。

二日^{十六日}_水 居庸関、八達嶺を見て、南口に帰り、更に貫市に行き泊す。南口^{十五里}、居庸関^{三十里}、八達嶺、南口^{三十三里}貫市。貫市の李家に一泊。

三日^{十七日}_木 清河を経て帰寓。行程七六十里、貫市^{四十里}、清河三二十里北京。新聞、家書を得。

四日^{十八日}_金 訳学館に如く。開学の為なり。

五日^{十九日}_土

六日^{二十日}_日 小村来る。川添弥市死去の為なり。岡本来る。

七日^{二十一日}_月 井戸川を訪ふ、不在。明日発足の為なり。

八日^{二十二日}_火 岡本来る。十日上程帰東のよし。因て筆、写真、茶碗を託す。

九日^{二十三日}_水

十日^{二十四日}_木 太田氏に如く。

十一日^{二十五日}_金

十二日^{二十六日}_土

十三日^{二十七日}_日 服部大学諸氏を招く。午前学生麟祉を携へテ佐藤医学士をに到る。家書、新聞を得たり。

十五^{二十八日}_月四日

十五日^{二十九日}_火 雪。

十六日^{三十日}_水 陰。

十七日^{二月一日}_木 為替を出す。

十八日^{二日}_金 保定牧田、井原二氏来る。

十九日^{三日}_土 小村来る。転宅の事を謀る。

二十日^{四日}_日 城外散歩。牧野、岡氏を林屋に訪ふ。風あり。

二十一日^{五日}_月 村岡琉璃廠に如く。

二十二日^{六日}_火 小村を訪ふ。

二十三日^{七日}_水

二十四日^{八日}_木 午前三時出門。文廟積奠を観る。

廿五日^{九日}_金 家書を得たり。

廿六日^{十日}_土

廿六七日^{十一日}_日 城壁を歩して平則門に至り、下りて月壇を過ぎて前門に出で、
帰る。牧、鶴岡、岡三氏来る。鶴岡名永太郎、満州太郎也。岡名幸七郎、漢口
にありて朝日の通信者たりしと。

廿七八日^{十二日}_月 家書、朝顔の種子を得たり。金氏に問ふに商事上の事を以て
す。曰、

現在商人は十之三四を以て通常の利益とす。地子錢一畝^{二百四十歩} 租価毎月一兩
餘、典鋪毎月三分。城外一畝之地、貴者凡三十兩、城内凡四倍云々。支那营造
尺一尺当比日本曲尺一尺其長五四分、然支那五尺為歩、日本六尺為歩、故支那
一歩畝狭於日本一歩段。

支那以营造尺方五尺為歩。

日本以支那营造尺方五尺七寸六分為歩。

廿九日^{十三日}_火 正金^江如く。夜梁田氏を訪ふ。

三十日^{十四日}_水

三十一日^{十五日}_木

四月一日^{十六日}_金 風邪、~~日~~不參出。

二日^{十七日}_土 訳学館にて写真、陶大均と逢ふ。

- 三日^{十八日}_日 雨、神武天皇祭。
- 四日^{十九日}_月 山本に行き、借宅のことを謀る。
- 五日^{二十日}_火 清明に付休業。正金より金三百元を借る。
- 六日^{二十一日}_水 上野朔郎来る。
- 七日^{廿二日}_木 大風雨。然れ共東京のアラシより軽し。雨雪。
- 八日^{廿三日}_金 服氏に鎮国將軍其他来る。余亦会す。
- 九日^{廿四日}_土
- 十日^{廿五日}_日 風邪臥床。家信を得たり。
- 十一日^{廿六日}_月 内田鉄一郎来る。堀部氏の後任として、此度八旗中学に來りし人なり。
- 十二日^{廿七日}_火
- 十三日^{廿八日}_水 甜水井ノ宅ニ至ル。
- 十四日^{廿九日}_木 転宅。午後外務部ニ至り、西太后の油画を見る。三十四五ノ人の如し。米國博覽會に出して後大統領に贈る品のよし。小村来る。支那二十八十三日旅順攻撃戰艦を撃沈し、マカロフチリール親王溺死、生者四人なりと。四人の内一人はチリール親王のよし。然し負傷せりと。
- 十五日^{三十日}_金 弓削、上野来る。弓削は油津人なり。ハルピンにて医を営み居りしが、開戦の一日前に当地に來りしと。杵淵、山下などを知れり。三時過服盛甲廠に往き、夜歸る。俸給受取る。
- 十六日^{三十一日}_土 高橋君来る。相伴ふて崇文門外蟠桃宮に行き、ソレヨリ林屋の大學訳學館諸氏を招く會に赴き、夜歸る。會場にてチリール親王實は戰死のよしなる事を聞けり。
- 十七日^{一日}_日 學生徐、麟二人来る。午後牧、杉二氏来る。杉氏夕飯後□る。牧氏云ふ、親王病を無して、ハルピンに行くと。
- 十八日^{二日}_月 服氏來り、翰林院往觀の事を話しあり。歸後繁子来る。夕食前佐伯氏来る。

- 十九日^{四日}_火
二十日^{五日}_水
廿一日^{六日}_木 翰林院に往き、『永楽大典』を観る。
廿二日^{七日}_金 服部へ行く。
廿三日^{八日}_土
廿四日^{九日}_日 庭前にて訳学館学生二人と写真す。
廿五日^{十日}_月
廿六日^{十一日}_火 考試。
廿七日^{十二日}_水
廿八日^{十三日}_木
廿九日^{十四日}_金 碧雲寺に遊ぶ。
三十日^{十五日}_土 金毘丸、五洋丸遭難の報あり。

- 五月一日^{十六日}_日 華東ホテルノ招宴に赴く。^{午前李盛鐸氏を訪ふ。}
二日^{十七日}_月 弓削、西川、岡の諸氏来る。大風。
三日^{十八日}_火 九連城占領の公報あり。大風。
四日^{十九日}_水 午後服部へ行く。大風。
五日^{二十日}_木 小村、長渡二子来る。快談夜に入る。
六日^{二十一日}_金 招魂祭にて射的場に行く。午後服部家族一同来る。第三回旅順閉塞の報あり。
七日^{二十二日}_土 村岡八達嶺に行く。二泊の予定なり。第二軍遼東上陸の報あり。復州なりと云ふ。家書、新聞、次郎の写真等来る。若宮より下谷一条及結婚一条の手紙来る。
八日^{二十三日}_日 午下風起る。旅順大攻撃の報『北支那』にあり。服部子供来る。『後甲集』を読む。「西北不知耕、東南不知戦」の語あり、地文学地図^{三本}着。
九日^{二十四日}_月 村岡八達嶺より帰る。

- 十日^{二十五日}_天 普蘭店占領、鉄道破壊三英里云々の報あり。午後佐伯氏に行き、牡丹を観る。微雨。
- 十一日^{二十六日}_未 亦雨。五月一日の家信を得たり。サクラパイプ来る。『経籍跋文』末尾に李氏『集解』を論して、毛氏本、雅雨堂本の非なるを挙げたるを読む。
- 十二日^{二十七日}_未
- 十三日^{二十八日}_金
- 十四日^{二十九日}_土 俸銭受取る。午後隆福寺に如く。佐伯氏来り、一泊。夜雨。
- 十五日^{四月初一日}_日 雨。張、汪二氏来る。午飯して返へる。
- 十六日^{二日}_月 【眉註：五十元を李に払ふ】今日より午前七時半始業となる。逸見来る。
- 十七日^{三日}_火 病の為に休、為替を出す。昨日汪の話に『周易集解』ハ近人王先謙の校刻本よしと云へり。又谷口、高野より頼みの書籍小包にて送る。『明詩別裁』呉騏の照烈の詩に「名儒盧鄭久周旋」の句あり。劉備は鄭玄に学びしか。
- 十八日^{四日}_水 家書、新聞を得たり。午後杉、太田、高橋三氏を招き、アヒルのスキヤキで日本風の宴を張也催せり。
- 十九日^{五日}_木 羊かん、茶の小包着。午後繁子^{〇〇}来る。
- 十九日^{六日}_金 初瀬、吉野遭難の報あり。
- 二十日^{七日}_土 午後公主坟に遊ぶ。
- 二十一日^{八日}_日 長渡氏を送りて停車場に至る。逸見二等車にあり。人を見る事をはばかりるものに似たり、故に語を交へず。ソレより弓削を訪ふ。二十三日^{十日}_月午後小村来り、公使よりの伝言なりとて、書生二人の同宿を求む。幸明き間あるにより差支なき旨返事せり。書生は西田耕作^{京都}、和仁^{美作}と云ふ。同文

1 原文のまま。本日より十三日までの日付は一日ずつずれている。

会卒業生なり。

二十二日^{未_九日} 西田、和仁来り。少時にして帰る。『太平洋新聞』来る。和田倉内にて死人数多ありし旨東日本にあり。

二十三日^{未_{一〇}日} 正金より三十元引出す。

二十四日^{未_{一〇}日} 午後雨、雷あり。少時にして晴る。

二十五日^{未_{一〇}日} 西田、和仁来る。相共に前門に遊ぶ。夜佐伯氏淑子を携へて至る。九時帰る。送りて長安街に至り別る。

二十六日^{未_{一〇}日} 隆福寺に遊ぶ。公使館に如く。

二十七日^{未_{一〇}日} 服氏来る。金州占領の報あり。家書、新聞来る。

二十八日^{未_{一〇}日} 午後前門に遊び、高橋君を誘ふて帰る。高橋君一宿。此日房主人の招きにより蒙古官人と相話す。雷雨。

二十九日^{未_{一〇}日} 料理人に十五元給す。午後牧氏来り。戦争談あり。

三十日^{未_{一〇}日}

六月一日^{未_{一〇}日}

二日^{未_{一〇}日} 大連占領の公報あり。脇光三外三人捕はれたる事を聞けり新聞にあり。一宮、大原、阿部三氏来る。同文書院卒業生なり。家書、新聞来る。

三日^{未_{一〇}日} 服部、佐伯二氏と保定に如く。十一時過ぎ着。服部氏後れて至らず、佐氏と発す。十一時過ぎ着く。渡辺氏停車場にあり。洋務局何氏来り迎へ、其案内にて洋務局に至り、西洋料理の馳走あり。天熱、食後一睡。六時過ぎ服氏来る。

四日^{未_{一〇}日} 学務校司に渡辺氏を訪ひ、共に武備学堂、師範学校、農務学堂、東文学堂を参観して、蓮池書院に至る。十二時北村氏に至り、一宿宿。亦熱。

五日^{未_{一〇}日} 楊布政司を訪ひ、松平氏に至る。午飯。二時五十分乗車帰寓。

六日^{未_{一〇}日} 今夜鈴木、高橋、西村三氏来る。

七日^{未_{一〇}日} 午後繁子来る。

八日^{二十五日}_(火)^[木] 歐陽弁元妻訃書来る。

九日^{二十六日}_木 午後大学に如き、西村氏を訪ふ、夜佐伯氏来り、一宿。

十日

十日^{二十七日}_金 夜佐伯氏来ル。大熱、八十二度。

十一日^{二十八日}_土 午後歐陽氏を吊す。席上章適駿に逢ふ。士官校卒業生なり。目下鍊兵処に居る。日本語に巧なり。午下雨。

十二日^{二十九日}_土

〔第一冊末〕

李盛鐸 蔣式理 胡宗瀛 紹英

吳凌秋 金星淮 °張緝光 °吳葆誠

°楊寿桐 呂烈輝 °周景涛 榮慶

于式枚 °端緒 °張素梁 博啓

張百熙 金国璞 文麟 °朱

章宗祥 胡玉麟

張百熙 西城甘石橋

榮慶 ˆ 茶葉胡同

孫家鼐 城外後孫公園安徽會館

紹英 朝陽門外內新鮮胡同

榮勳 南鑼鼓巷綿花胡同路北

張亨嘉 順治門外爛麪麪胡同

北京—湯山

湯山—昌平—十三陵—南口

南口—居庸—八達嶺—居庸—南口—貫市

貫市—黒龍潭—臥仏寺—玉泉山—万寿山—北京

〔以上 第一冊〕

六月十二日^日_{二十九日} 戒田氏来る。十時〈除〉〔徐〕胡の二氏来る。共に山本に往き写真す。

十三日^月_{五六月卅日} 俸給受取る。午後杉、佐伯、服部、高橋諸氏来る。夜公使館に如く。

十四日^火_{五月一日} 陰。家信、新聞等来たる。五百円の応募立申し込む。四時過雷雨。

十五日^木_{三日} 端午に近きため歟、戸々蒲艾を挿みたるを見る。女兒の辮子の端、人力車などにもあり。講堂の入口にもあり。暑中休み。十四日よりとの説あり。然し未定なり。午後八旗中学に如く。

十六日^木_{三日} 病気に付学校休む。夕食後服部に行く。壱岐近海二戦の報あり。

十七日^金_{四日} 午下大学に行き、服氏と張百熙を訪ふ。坐客多きを以て少時にして返る。運送船撃沈の報あり。

十八日^土_{五日} 端午節に付放学。午前前門に遊ぶ。交民巷にて佐藤軍医に会し、共に諸処見物して帰る。運送船の名は常陸丸、佐渡丸、和泉伊豫丸の三艘のよし。伊豫は逃げたるも餘の二船は撃沈せられたりと。常陸—佐渡は三船共六千噸、和泉は三千噸なり。午後牧之田氏来る。此日大涼。【眉註：一隻は和泉丸なりとの説もあり、和泉は三千噸なり。】

十九日^日_{六日} 陰。三隻の露艦津軽海峡に顕れたる報あり。午後東安門内普都度寺の納涼会に如く。

二十日^月_{七日} 晩方繁子来る。帰国の為なり。

二十一日^火_{八日} 服部に如く。熱、八十三度。午後パイナップル、シャツ小包で届く。

二十二日^{水九日} 繁子出発、停車場に見送る。八十三度。

二十三日^{木十日} 熱。八十三度。夜間公使館に如く。得利寺の捷報あり。

二十四日^{金十一日} 熱。

二十五日^{土十二日} 今日よりまでで訳学館放假となれり。七月一日天津発招商局新祐号にて出発の事に予定せり。午後朱より明日招待の手紙来れり。公使館に招かる。

二十六日^{日十三日} 昨夜公使館にて旅順露艦不残出口、一隻撃沈の電報来りしが、其外の船は何如にせしか。インデペンデント号は二十三日来着の筈なるも未来、バベルスベルグ号も無事なるや何如、心配の事なり。午後朱の招きありしも病を以て断れり。

二十七日^{月十四日} 服部於正金に行き、午後大学に行く。五時より房主人に招かれて源宝堂に行く。月俸受取る。

二十八日^{火十五日} 雨。前門外に買物に行く。正金に百五十元返す。佐伯氏来る。梅雨の天気如し。

二十九日^{水十六日} 張大臣と訳学館に手紙を出して、東文廃止一条を注意す。

三十日^{木十七日} 学生に招かれて後門外の料理屋に行く。

七六月三十一日^{金十八日} 一番で天津に行き、東雲館投宿。張同行。張は中和棧投宿。招商局汽船満員にて七月四日ならねば乗船出来ずと報あり。又アルゴ号五六日開帆、芝罘を經由して門司に向ふとの報あり。因て上海經由を見合せ、アルゴ乗船の事を張と相談セリ、同人も同意セリ。

七月一日^{土十九日} 天津にあり、関本、中谷、永紀田三子と逢ひ、語るに山海関一遊の事を以てす。中谷氏往かんと云ひしを以て、明朝を期して就寝。【眉註：男児重意気、何用钱刀為²。】

2 漢樂府詩「白頭吟」の詩句である。

二日^{二十}_日 【眉註：上有加餐餐飯、殮食、下有長相憶³。】山海関に向ひ發す。二等六元餘なり。停車場の名は下の如し。北塘、蘆台、塘坊、胥各莊、唐山、開平、窪里、古冶、雷庄、灣州、石門、安山、昌黎、留守台、北戴河、湯河、山海関。六時頃着。登本松村旅館に投ず。胥各莊は粗造の水瓶を製す。備前焼に似たり。唐山、開平は有名なる石炭鉱あり、石門辺リング多し。灣州、昌黎には日本の分管あり。今所謂礪石は昌黎の南にあり。

三日^{二十}_月 汽車にて秦皇王島に遊び、兵營に至り。門馬中尉に晤す。歸りて長城に遊ぶ。秦皇王島には英仏独の兵あり。日本の占領地もあり。

四日^{二十}_日 雨を冒かして海岸に至らんとせしが益々強きを以て至る能はず。仏砲台の下より歸る。当地には英仏独以露の兵あり、皆砲台に拠りて兵營とす。日本兵營は最も大なり。当地避難人多くして非常に混雑せり。当地より二里北に無煙炭出る山あるよし。又秦皇王島より北京に至る一条の鐵路布設に適當なる線路あり、測量もすみ居るよし。此の道に由れば一日に往復出来るよしなり。目下の路は北京まで二百七十六マイルなりと。

五日^{二十}_日 一番で塘沽に向ひ發す。古冶附近にさつま芋畑あり。唐山より西にはっか畑あり。桑も時々あり。午後一時塘沽着。張と逢ふ。

六日^{二十}_日 太沽砲台を見物す。午後三時アルゴに乗る。積荷多くて本日は出帆せず。

七日^{二十}_日 今日も出帆せず。積荷は羊毛羊皮なり。戦備なり。

八日^{二十}_日 午前五時出帆。海上平安。夜十時旅順の方に探海灯光を見る。

九日^{二十}_日 午前五時芝罘着、上陸。夜十二時出帆したるが、船員負傷の故を以て芝罘に歸る。

十日^{二十}_日 十時出帆、午後七時山東角を離る。

十一日^{二十}_日 夫風雨。黄海にあり。朝鮮沿岸にて日暮。

3 漢樂府詩「飲馬長城窟行」の詩句である。

十二日^火 風浪高し。濟州島の北で軍艦二隻が一隻の御用船を護送して北に向ふに逢ふ。皆万歳を喝ふ。後に聞けば、安藝丸にて大山、兎玉二氏乗り組のよし。

十三日^水 船進まず。夜に入り風浪収まり、舟行稍急。十一時対馬灯台を見る。

十四日^木 午後一時門司入港。

十五日^金 広島沖にて天明。夜十時和田崎に着く。

十六日^土 午前七時神戸上陸。

十七日^日 七時三十分汽車にて東京に向ふ。

十八日^月 午前十一時新橋着。家にある間は記せず。

八月十八日 藤沢発。

十九日 大坂同姓方に着。

廿日 北河内内源氏滝に行く。望月、岡野同行。

廿一日 現長に行く。松島橋の鳥屋なり。

廿二日 住吉に行く（夕食後一同で行く）。社内の月よし。

二十三日 神戸に行き、大坂に帰る。

二十四日 大坂にありて買物す。

二十五日 尾の道に行く。

廿六日 舟遊。□□島

廿七日 舟遊。□□□□

廿八日 鞆に行く。仙酔島の下で昼食。

廿九日 浄土寺の後山に遊ぶ。

三十日 神戸に帰る。雨。

三十一日 神戸にあり、風雨。佐伯氏来る。

九月一日 全上。晴。

- 二日 乗船。午前十一時出帆。佐伯、楠原二氏同乗。
- 三日 午前十一時門司着。
- 四日 長崎着。福島屋にて午飯す。
- 五日 釜山着。曙湯にて午飯す遼陽祝勝会にて、
ニギヤカサリ。
- 六日 海上にあり。
- 七日 仁川に入る。上陸して、京城に行き、巴城館投宿。飯泉と逢ふ。
- 八日 仁川に帰り乗船。飯泉送り至る。写真す。
- 九日一廿 芝罘着。領事館に行く。
- 十二日 太沽着。
- 十三日 北京着。服部来る。
- 十三四日五辰 訳学館に行く。小村、佐伯来る。
- 十四五日六辰 林屋の宴会に行く。小泉土之丞送別。
- 十五六日七辰 源宝堂の宴会に行く。中島真雄の招きなり。
- 十六七日八辰 雨。
- 十七八日九辰 午前隆福寺に遊び、夕食後城上に散歩す。北風微寒、重衣を着す。
- 十九日十辰 尚寒。債券の払込并に東京へ百二十元の為替を為す。
- 二十日十一辰 稍暖、風邪にて欠勤。遼陽戦利品の公報達す。西田保定より帰る。花岡、坂本二氏来る。小村来る。
- 廿一日十二辰 病未愈。服氏来る。見舞の為なり。
- 廿二日十三辰 出勤。夕方西村、高橋二氏来る。
- 廿三日十四辰 夕方華東ホテルに矢部氏を訪ふ。
- 廿四日十五辰 午前七時三十分前門西停車場発、長辛店下車。驢を雇ひて、潭柘寺に行く。一嶺を踰ゆ、嶺頭門あり。遥かに寺房を見る。人に問へば、戒台寺なり。是亦有名なる寺なるを以て見物せり。山に雑木多くして、稀是まで見た事なき位なり。寺最高処にあり、直隸平原を見下し、中々景色よし。寺を出て半路より北に下むる險悪なり。嶺を踰ゆる二にして、羅睺嶺の官道に合す。嶺

を下り、一山下を繞る川あり、水なし。川に沿ふて上れば潭柘寺なり。【眉註：寺ノ大和尚ノ名ハ慧寬ト云フ】寺域廣大にして清淨無比。廟屋四層あり、最上層層に登れば四近の地皆眼下にあり。全山皆柏、清涼の氣人を襲ふ。夜に入り、月光極めて好し。長辛店より五十里、北京より七十里、長辛店三十一里戒台寺十八里潭柘寺。【眉註：羅喉嶺下田畝間往々山老紅アリ、実正に熟し、美麗なり】
 廿五日廿六日 【眉註：長辛店十一八里、ホイチャング十四里、戒台寺十八里、潭柘寺。】午前三時寺を出で、十一時三十五分長辛店に至り、十一時五十分の汽車で帰寓。此日黒沢氏の送別会あり、たれど疲労甚しきを以て行かず。佐伯氏来る。

廿六日廿七日 夕方太田氏を訪ふ。高橋氏あり。

廿七日廿八日 矢部氏来る。晩食後盔甲廠に往かんとして門内にて西村氏に逢ふ。共に至る。九時過帰寓。

廿八日廿九日 午後矢部氏を伴ふて隆福寺に遊ぶ。家書二通、新聞を得たり。郡司大尉の変報あり。又川浪嶋浪早が勲章位記を取り上げられたる風説を聞けり。天気稍熱。

廿九日三十日 午後雨。川島の事は誤聞なりし。

三十日三十一日 午後前門散歩。帰途小村を訪ふ。兎玉氏旅順に向ひし事及び、馬賊が六百五十万個の敵弾丸を奪ひ之事、松崎、服朝岡【眉註：脇】田村が蒙人の虐殺に逢ひし事を聞けり。

十月一日十二日 『浪語集』を買ふ。価二元なり。□□□□安井重敏より手紙来り、遼陽の役負傷して當口病院に居るよし通知あり。

二日十三日 公使館、巖谷、鈴木、杉を訪ひて、午後帰寓。

三日十四日

三日十四日 陰。高橋氏来る。午後兵營の招きに因り至る。はなしか、義大夫などあり。九時頃帰る。

四日^{二十五日}_火 花岡帰朝に付書を狩野氏に托し。村岡に停車場まで送らす。西田も天津まで同行せり。『韋齋集』と『剡源集』の附録を購ふ、十元なり。夜公使館にて義大夫会あり。毛谷村六介、判官切腹など四段ほど語りたり。中位の出来なり。天津三井組にて呼びたるよし。十二時過帰寓。

六日^{二十六日}_水 肇鴻来りしが、睡眠中にて不面。同人は吉林將軍の子のよし。弓削より紹介ありし人なり。

七日^{二十七日}_木 孔子生日に付放学。村岡、高橋、西村、矢部と二圃に遊ぶ。秋色掬すべし。午後大風。不在中肇鴻来れるよし。

八日^{二十八日}_金 鈴木来る。書估『陸深集』を持ち来る。不買。『清吟集』三を買ふ。午後風。

九日^{二十九日}_土 午後章宗祥の招飲に赴く。微雨。妻懋總は実践女学校の卒業なり。常に日本服なりと云へり。夜九時帰寓。□□□□鄒一桂の菊花の幅を買ふ。五元なり。東京に百五十元為替。

十日^{九月一日}_土 雨。ウドンを食す。

十一日^{二日}_日 西田天津より帰る。牛肉の土産あり。午後肇鴻来る。夜小村来る。陰。百五十元為替す。

十二日^{三日}_月 陰雨。小村に十五元送る。

十三日^{四日}_火 陰。弓削に十元返金。

十四日^{五日}_水 午後監甲廠に往しめんとしける時矢部氏来りしかば、村岡と共に前門に行けり。晩食前帰寓。正金より十五六日の案内来る。家書を得。

十五日^{六日}_木 奉天敵兵退去の報あり。

十六日^{七日}_金

十七日^{八日}_土 正金の招きにて芝居ヲ見ル。

十八日^{九日}_日 小村より帰朝の手紙来る。

十九日^{十日}_月 正金に往き国債金の立換を相談す。夕方停車に志げ子を迎に往く。

二十日^{十一日}_火 考試あり。午後正金監甲廠に往く。

二十日^{十二日}_木 暖炉を抛ゆ、北村、澤吉来る。蓮池書院の石摺数本を贈らる。服氏来る。北村一宿。

二十一日^{十三日}_金 北村一宿。

二十二日^{十四日}_土 北村帰テ、保定、小村、營口を経て帰朝。風邪に付送る能はず。

二十三日^{十五日}_日 午前、永定門西南一里餘の趙村店に遊び、植木を観る。植木屋数戸あり、一戸姓王子禎と云ふあり、長崎、大坂に行きしよし。菊、スミレ、仏子柑などあり。其家北にある家も王姓なり、ムロ五六あり、可ナリの家なり。大街の左右皆植木屋なり。午後四時盃甲廠に往く約ありしを以て、二軒だけ見て帰る。此日風なく、暖かなり。矢部氏同行。帰後盃甲廠に行く。趙村店は前門へ十五里_{支那里}、順治門へ十里、南西門へ五里なりと云へり。

廿四日^{十六日}_月 植木屋来る。午後矢部氏、佐伯氏来る。

廿五日^{十七日}_火 佐伯氏来る。村岡趙村店に如く。

廿六日^{十八日}_水 村岡趙村店に如く、杉氏に如く。田田直井氏来る。

廿七日^{十九日}_木 家書、新聞、手袋等来る。

廿八日^{二十日}_金

廿九日^{二十一日}_土 午後服氏に往く。

三十日^{二十二日}_日 矢部氏来り、村岡と散歩に往く。西村氏来り、共に兵營に往く。

三十一日^{二十三日}_月

十一月

一日^{廿四日}_火 佐伯有信来る。知県王某の陵遲の刑に処せられたるを見たり云々。繁子来る。

二日^{廿五日}_水 新聞来る。服部より条約書の事問合せあり。

三日^{廿六日}_木 天長節、公使館、兵營に往き、夜再び公使館に往く。朝、庭で写真す。

四日^{廿七日}_金 病氣、不出。

五日^{廿八}_土 本月月俸受けとる。同文書院森氏来る。学生七十餘人を率て来りしよし。旅順危急との風説高し。又黒木大将赤痢で死去の風説あり。

六日^{廿九}_日 八旗学堂に直井氏を訪ひ、肇鴻の招宴に赴く。東京に二百元為替、參百円の国債申込。

七日^{三十}_月^一_日 同文書院学生小田原、朝稲、柏田、外一人来る。

八日^二_火 公使館に如く。

九日^三_水 徳興堂、矢部、川田に往く。同文書院学生十餘人来る。山本写真出来たり。

十日^四_木 同文学生北京を去る。

营造尺一尺は曲日本曲尺一尺〇四分五に当る。

营造尺六尺為歩、三十百六十歩為里。

十一日^五_金 家信、新聞を得たり。

支那錢四種あり。

一、制錢 一千枚^{実九百八十枚}為一吊^{当十錢ノ十吊〇}

二、京制錢^{又老錢〇} 五百枚為一吊^{当十錢ノ五吊〇}

三、当十錢 五十枚^{四十八枚}為一吊。

四、京制錢^{薊州附近ノ通用錢〇} 一百六十五枚為一吊。

十二日^六_土 杵淵清一郎營口より来る。本日天津に往くよしにて、少時面晤せり。營口茂利洋行に居るよし。今日『順天時報』に左の記事あり。

山西陽平郡尉遲氏係唐朝鄂国公之裔、一省之巨富、亦実中国各省中第一巨富。各処所開蔚泰厚、新泰厚之東家は是也。伊家主事人名尉遲達、乃壬午第二名拳人云々。支那で有名なる財産家と見ゆ。

十三日^七_日 外債三一億二千萬を〈券〉〔募〕り得たる旨及京釜全通の報あり。此の日大風。

十四日^八_月

十五日^九_火 万寿節に付今日明日放学。尚風。

十六日^{十日}_水 万寿節。午後西直門外に遊ぶ。街上異なる所なし。唯門戸に懸紅結彩あると、楹聯皆万寿の意を述ぶるとのみ。帰途隆福寺に遊ぶ。家信、新聞、小包を得たり。

十七日^{十一日}_木 川田、直井、松島三氏帰国に付停車場に至る。それより琉璃廠に至り、『帝王宅京記』一套を買ふ。

十八日^{十二日}_金 河南彰徳府まで汽車開通して、十五日より切符を売り出だせるよし。又伝聞此次万寿節に際し、袁世凱^{ガイ}は四十万両、那桐は二十万両を、其他大官達も巨万を進献し、少なき人でも一万に下らざるよし。現皇帝は九万両を進上したるが少額なる以て、西皇后は叱責して却下せりと。方今清国政費極多、練兵処、外国債、其の他新興の事業に要する一ならず、毎年外国に払ひ出す賠償金丈でも四千万なり。然るに不要無用な事に巨額の金を費し居る清国当局者の考は実に不可思議千万なり。総稅務司ロバートハートの地租改正意見も張之洞其の他の反対に因りて多分行はれまじ、財政の前途何如なるべき歟。此の分にては清国は財政にて非常な困難なる地位に陥るものと思はる。

近来満州に対する主権問題少しく起れり、本問題は実に至難なる問題なり。

又対韓国問題も追って實際問題となれり。朝鮮に対しては官制、法律の問題は切要ならず、唯邦人が実利を得るを至要とす。故に土地所有及耕作、住居、営業、漁業、鉱山等を最要の問題とす。風俗習慣を変易する必要はなし。是等は追って変更すべければ急ぐに及ばず。又前日杵淵の話に、北京より營口まで二日（山海関一泊）、營口よりダルニーまで十八時間のよし。冬季になれば満洲地方に要する貨物は総てダルニーより上陸となるよし。

十九日^{十三日}_土

廿日^{十四日}_日 村岡、川田と大学に至り、西村氏を訪ひ、共に肇鴻を訪ひ、転して雍和宮に至り、劉明琨と会晤す。劉は宮内にて仏画を作る画工なり、東京に一遊したるよし。ラマ教に関せる書名を問ひしに、……、……の四書を挙げて答へたり。【眉註：『〈蔵衛〉〔衛蔵〕通志』、『喇嘛例』、『藩部要略』、『同文統

韻】午後帰寓、又出門。服氏を訪ふて、九時過帰る。天気和暖、此ノ日兵營にて要塞攻撃に関する講話ありしよし。

廿一日^{十五日} 家書、新聞を得たり。

廿二日^{十六日} 北京より順保定及順徳に至る汽車賃に改正ありたり。北京保定間一、五元四角、二、三元六角、三、一元八角、北京順徳間一、十四元一角、二、九元四角、三、四元七角。【眉註：54/36 54 18/54 1倍 二等ハ三等ノ倍、一〈頭〉〔等〕ハ二等ノ五割増シ】『大公報』に左の記事あり。

按前曾奉諭三四毛者収小洋、五毛以上者則収大洋云。停車場で切符を買ふに四十錢以下は小銀貨で好いが、五十錢以上は一元銀を出してツリを取る事と定めたるなり。張百熙より来廿八日招待なみノ手紙来れり。

廿四三日^{十七日} 昨日ノ『大公報』に樟腦製造ノ事を論ぜり、其の内に我中国自巴蜀以東踰衡湘涉彭蠡而迄乎泉漳、綿延六千餘里云々とありて、其地に楠多き事と椽ノ葉は蚕を飼ふべき事とあり。事実なるか不審。又張之洞の奏文に「全国民人納銀於官者以地丁漕糧為最多」とあり。

廿五四日^{十八日} 黄楸材の『印度割記』中に四川の打箭炉にて砧茶、包茶を産出すると記あり。

廿六五日^{十九日} 小野に吊詞を出す。金曰、日清戦争の際、日本人石川伍一ト云ふ人引き上げずして、支那人に粉して天津に居たるが、一日芝居見物に行き、極妙の処に至り不覚拍手したるを以て外国人なる事知れ、極刑に処せられたり云々。石川は知人にて高β号一条に大関係ある人なり。

二十七六日^{二十日} 午後服氏来る。

二十七日^{二十一日} 午後張百熙の招宴に赴き、便路戒田氏を訪ふ。不在。

二十八日^{二十二日} 家信、新聞を得たり。

二十九日^{二十三日} 『国朝耆献類徴』二百四十二本、清初より道光に至る各種の人を輯む。又書肆は直隸保定の南三百冀州府西北部邵村の産なり。其音冀^キ、九^{キウ}、去^{キユイ}なり。山東人キ音なりとは一般の説なれど、直隸南方に已にキ音

なり。【眉註：双翹】

三十日^冬_{二十四} 『初学集』『有学集』を買ふ。価二十六元なり。

吹きすさぶ西山おろし夜を寒みわきて此比心ませ君

年毎に訪ふ滝の川紅葉の錦碎←流るる秋は来^日_日ぬらん

大君の御園の菊も紅葉も今年はわきて色まさるらん

月影を独り詠むる心こそ心にあらぬ心なりけれ

閑さびし冬の夜寒し鐘の音を聞きあかしてぞ我は過ぎぬる

十二月一日^{二十五}_木 風邪にて欠勤。

二日^{二十六}_金 村岡通訳の試験に行く。風邪未愈。

三日^{二十七}_土 出勤。村岡採用せらる。月俸四十二円なり。江海海関長袁某が各省督撫に与えて賠償金の納附を催促する文を得たり。

直隸\

安徽 五十万両 江海関税を合して

福建

河南/

江寧\

江蘇 八十万両

江西/

浙江\ 七十万両

四川/

湖南\

山東 六十万両

山西/

湖北 九十万両

兩粵海関 三十万両

閩海海関\

江漢海関 二十万両

津海海関/

燕湖海関 十万両

東海海関 十万両

広東海関 三十万両

計九百八十万両なり。江西省は土匪の乱あるを以て其高を限ラズ、出来る丈との照会なりし。此は支那が団匪事件にて年々外国に支払ふ高なり。土地の貧富を知る便あるを以て抄記す。此の外の省は知る能はず。

午後服部、汪に如く。

三四日^日_{二十八日} 午後林井上勝氏の歓迎会ありしが、風邪未愈なりしを以て行かず。

五日^日_{二十九日} 家信、新聞来る。信中に石幡の養子戦死の事あり。

六日^日_{三十日} 月俸受け取、百四十九円二十銭。為替す。服氏来る。

七日^日_{十一月} 公使帰朝に付、公使館に如く。石幡吊詞を出す。石幡の子息を悼みて、

大君につくす心の一筋に露と消エし君をしぞ思ふ
長へに□はありと人は云へど絶せぬ涙我いかにせん
□□を父や在ると稚子が尋ぬる心いかに見るらん
右一首東嶽翁に寄す。

八日^日_{十一月} 營岩切来る。

九日^日_{十一月} 由本公使帰朝に付停車場に見送る。停車にて与倉に逢ふ。共に山本に至り、朝食して上学。帰れば、山本、与倉来り居る。午後飯して山本と与倉を見送り停車場に至る。

4 原文のまま。本日より十三日までの日付は一日ずつずれている。

九日^{四日}_土 村岡送別のために盔甲廠に招かる。

十日^{五日}_日 村岡、川田と前門に散歩す。午後村岡送別の為に瀬上、山本、阿部、角村四人を招く。

十六日^{六日}_月 落合、与倉の手紙を認む。落合の手紙に、日の御旗高く捧げて軍人打てや御国にあだなす敵を外二首不記。

十二日^{七日}_火 服部、太田、矢部諸氏来る。村岡の為なり。

十三日^{八日}_水 昨夜より降雪。村岡上程の為午前四時起床。積雪二寸餘、尚未止。五時西村氏来る。六時停車場に至る。風雪霏霏、八時雪止む。

十四日^{九日}_木 韓国高橋亨手紙来る。寒甚。

十五日^{十日}_金 朝七時、寒暖計を把りて見れば、二十四度なり（昨夜窓外に置きし者）。村岡、佐伯の山海関よりの端書来る。【眉註：二十四度】

十六日^{十一日}_土 又寒。

十七日^{十二日}_日 家書、新聞来る。午後牧氏来る。家主より案内状あり。【眉註：「二十尚未足、十五頗有餘。」⁵⁾】

十八日^{十三日}_月 氏家、坂本、鈴木三氏来る。天気稍暖。

十九日^{十四日}_火 『大公報』に「中国度支論」あり。其中より出入項目を抄出す。

直省歳徴地丁銀	二九四〇、〇〇〇〇兩
塩税	二七四、五〇〇〇
関税	五四一、五〇〇〇
沿海沿河蘆課	十一二、二五〇〇
魚課茶課	九、八〇〇〇
落地税	八五、八〇〇〇
民間房屋税	一九、〇〇〇〇

5 漢樂府詩「陌上桑」の詩句である。

雲南鈔税	八、一〇〇〇
山西湖南四川兩広各鈔常例捐	三〇〇、〇〇〇〇
浙江湖広江西河南山東八省漕糧銀	四六〇、一九〇〇石
新疆屯田糧	二四、〇〇〇〇石
右歳入銀四千四百九十万零九千五百兩	
同 米 ^三 四百八十四万一千九百石	
滿漢支餉米草豆銀	一七〇三、七一〇〇
王公百官俸銀	九三、八七〇〇
賓祭備用銀	五六、〇〇〇〇
文職養廉銀	三四七、三〇〇〇
武職養廉銀	八〇、〇〇〇〇
滿漢兵賞恤銀	三〇、〇〇〇〇
外藩俸銀	一二、八〇〇〇
宮中用顏料木料銅錫綢布絲線及織造	二六、一〇〇〇
京官各衙門公費飯食紙筆銀	一四、三〇〇〇
宮中花粉紙墨筆顏料燭火銀	一〇、〇〇〇〇
胥役工食銀	八、三〇〇〇
各省学校廩餼銀	一四、〇〇〇〇
驛站錢糧	二〇〇、〇〇〇〇兩
東河歳修費銀	八〇、〇〇〇〇
南河歳修銀	三〇、〇〇〇〇

右歳出銀二千七百〇六万〇八百兩

午後房主人の招きにより前門内の太昇堂に至る。

二十日^{十四日} 暖可なり。

二十一日^{十五日} 北風寒、村岡の手紙二通来る。「度支論下」に出入貿易額あり、抄出。

光緒五年

【眉註：光緒五年】

出入 八十二兆二十二万七千四百二十四兩

大出 七十二兆二十八万一千二百六十二兩

【眉註：同 二十四年】

入 二百九兆五十七万九千三百三十四兩

百兆一億なり、十兆一千万、一兆百万

出 一百五十九兆三番万七千一百四十九兩

又団匪事件賠償金四百五十兆三十九箇年賦で元利共計九百八十二兆二十三万八千一百五十兩。此外に日清役の三百兆あり。

午後歐陽弁元来る。十八日天津に如き、支那の二月頃日本に遊学するよし。

二十二日^未 冬至に付休学。金曰、北京下等人一日ノ食費十錢一吊、一間一ヶ月の屋賃七吊、衣服一ヶ年二十元位なり云々。又呉服屋の店人で一ヶ月三元位で、食事は給するよし。

二十三日^金 安徽省祁門県に白色土アリ、江西景德鎮の陶器は此種土を用うるよし（『京話報』）。

二十四日^土 稍暖。山西蒲州府首県永濟県柿樹甚多。県人以柿作酒作醋云々（『順天時報』）。柿で酒や醋を作るとは珍しい。又保定に目下錢が減少セシため、県令を出し、往来行旅の官商二十吊以上を携帯して境を出づるを許さずと云ふ（『大公報』）。奇令なる哉。茶、菓子、小包来る。

二十五日^土 『大公報』に湖南省の武昌、麻城、嘉魚、蒲圻、通城、應城は麻の産地にして、年額十万担あるよし記せり。又絡麻、黄麻、苧麻の三種あり。苧麻性脆、京中申錢の物は是れなるよし。布匹を製造するは黄麻なり。絡麻は紡織の用にならず云々。川湘汴の三省も麻を産するよしなり。

二十六日^日 金の話に北京官吏中の富者は慶親王にて、内務府の官吏中には二三百万兩の人沢山あり。又外省にては広東、福建、江西、山東など裕福の省なり。又北京呉服屋にその官吏商人を合して五六百万兩の人二三百家あらん

云々。本間大尉、木下副官旅順に出征するに付、餞別として二元を送る。旅順にて将校の戦死多きよしは、兼て聞き居たるが、駐屯軍より将校を召集するを見て、其説の信なるを知れり。支那日日日の産物中一茶、二塩、三江浙織品、四蘇越繡品、五天津毛織品、六江西湖南麻織品、七磁器、八景泰藍器、九宗教用品、十缶藏食品、十一雜貨、十二焼酒(日)。以上は露国に売れゆき望みあるものなりと清国駐露公使胡氏の報告なり(『大公報』)。

二十七日^{二十一日}_火 高橋氏来る。家書を得たり。

二十八日^{二十二日}_水 本間、木下二氏旅順に赴く。天陰。

二十九日^{二十三日}_木 家書来る。

三十日^{二十四日}_金 午後服氏に如く。露兵上海にて支那人を殺したりと中立違反の論支那新聞に多し、中立違反にはあらざるべし。村岡手紙来る。

三十一日^{二十五日}_土 前門外に遊ぶ。

三十八年

【一月】

一日^{二十六日}_日 公使館、兵營、日本人会に遊ぶに如く。

二日^{二十七日}_月 旅順日兩敵将乞降の公報あり。

三日^{二十八日}_火 乃木大將は敵将乞降に承諾を与へたる公報あり。又、陛下より大山元帥にステッセルを忠勇なる敵将として対遇すべき詔勅下れり。戦局は十の八分済み、此の後は満洲に付戦争に幾陪倍せる苦心を要す。

四日^{二十九日}_水 佐伯氏来る。八日祝勝会会あるよしなり。

五日^{三十日}_木 西村氏来る。

六日^{三十一日}_金 上学堂。館内風潮あり、学生騒然たり。

七日^{一日}_土 服氏宅にて河原氏と相見る。

八日^{二日}_日 祝捷会あり。

九日^{三日}_月 家信来る。

十日^五日^火

十一日^六日^水 山ノ城氏の信を得たり。中に記す同郷戦死者、飢肥^七人、酒谷^三人、細田^三人、吾田^三人、南郷^{十一}人、北郷^一人、榎原^三人、東郷^一人、田野^二人、清武^六人、青島^三人、赤江^十人、木花^九人、計六十二人。

十二日^七日^木

十三日^八日^金 訳学館のゴタゴタ治まる。

十五^九日^土 服氏にてカルタ会あり。服部、矢部二氏と隆福寺に遊ぶ。

十六^十日^日 後門外の招賢館にて懇親会あり。

十七^{十一}日^月 西村氏来る。

十八^{十二}日^火 佐伯氏来る。

十九^{十三}日^水

十九日^{十四}日^木 今日限りで冬期休業となる。正月十七日より始業。

二十日^{十五}日^金 『大公報』の記する所に拠れば、中国度支一年八千万両、同治以前には出入相当り居たり如し。出す所少し多きも捐金を以て補ふべかりしなり。日清役以来外債生し、元金利息で三千餘万兩の増加あり、団以後又増加して目下三千餘万兩あり、団匪以後更に三千餘万兩となれり、更にを加く。此の外帝室の外交費、軍餉、国用又各三千餘万兩を要するを以て、経費不足となる云々。案ずるに、戸部の歳入は一億前後にて、外債は一年に四千万兩を要するならん。外交費は三千万兩は入らずと思ふ。又同報に八旗の京に在る者二十餘万人とあり、各省駐防の旗兵亦称是とあり。

二十一日^{十六}日^土 陰。

二十二日^{十七}日^日

二十三日^{十八}日^月 服氏に如く。山本に如き、絵はがきを買ふ。

二十四日^{十九}日^火

二十五日^{二十}日^水 服氏より二十円借りる。矢部氏出立。終日雪。

二十六日^{二十一}日^木 矢部氏本日の『順天時報』に蒙古王の露党の事を記せり。左に

抄記す。

科爾沁右翼郡王 土地最富貴ノ由

札魯特貝勒

阿巴哈納爾貝子 北京俄党ノ運動家

多倫諾爾ノ喇嘛

察哈爾ノ台吉

訳学館の課始業は正月十七日と聞き居しが、今日の『京話報』に正月二十日よりとの広告あり。

二十七日^{三十二}_金 訳学館俸給取る。今日寒気甚し、営口の岩切、東京石幡、山井等書状来る。

二十八日^{三十三}_土 『北京志』の事で兵營に往く。

二十九日^{三十四}_日 又兵營に行く。沙河の大兵動き始めたる公報あり。

三十日^{三十五}_月 『大公報』に下僚の害を論ぜる文あり。其文に拠れば、各衙州県には籤稿書吏など云ふもあり、其下に快、壯、皂の三班あり。此の三者各二組に分ち、更に捕班三一組あり。都合七組なり。此は各衙にありて、人数も数十百人に下らずとなり。此等は皆良民の虎狼なるよし論せり。【眉註：籤稿は幕友ならん。馬快^{頭班}_{三班}、民壯^{頭班}_{三班}、皂吏^{頭班}_{三班}、歩兵。計七。】

又『京話報』に左の事あり。

光緒 四年 二百五十萬元^{五厘} 独逸

々 五年 一千六百五十萬元^{七厘} 匯豐銀行

々 十八年 三千万元^{六厘} 全上

々 十九年 一千万元^{六厘} 全上

々 二十年 一千万元^{六厘} 独逸

々二十一年 一万万五千八百二十萬元^{四厘} 露仏

々二十二年 一万万六千^{五厘} 英独

々二十四年 一万万六千万元^{四分五厘} 匯豐、徳華、正金

々二十六年 四万万五千万

賠償金_{四十七年賦}

右の利子六千万餘なりと。

右の内独逸外債七十五万円は償却のよし。二十六年の償金は六億五千と聞き居たるが、何に拠りて書きたるか、又正金銀行は関係なかるべきし。其他にも誤りあるべし。

午後前門外に皮買に行けり。帰途服部に行く。不在中佐伯氏天津より帰途、牛肉を贈らる。

三十一日_{天^{三十一}} 兵營に如く。

二月

一日_{天^{三十七}} 兵營より電報来り。營口行差支なきよし通知あり。

二日_{天^{三十八}} 旅行の準備すし、明日出発に決す。

三日_{天^{三十九}} 山海関大和館に宿す。

四日_{天^{四十}} 營口軍政署着。

五日_{天^{四十一}} 市内を散歩す。署にて夜会あり、内田公使と逢ふ。

六日_{天^{四十二}} 市内散歩、上野氏に晩食。

七日_{天^{四十三}} 医院にて晩食。

八日_{天^{四十四}} 午前十一時牛家屯乗車、ダルニーに向ふ。

九日_{天^{四十五}} 午後五時乗車、營口に向ふ。

十日_{天^{四十六}} 朝大石橋着。午前十一時營口着。

十一日_{天^{四十七}} 紀元節写真す。砲台に遊ぶ。

十二日_{天^{四十八}} 医院に遊ぶ。上野と写真す。

十三日_{天^{四十九}} 黒沢氏より招かる。

十四日_{天^{五十}} 医院に遊ぶ。

十五日_{天^{五十一}} 壺岐中尉、上野氏と遼陽に向ふ。

十六日_{天^{五十二}} 首山城堡見物、軍政署に宿す。

- 十七日^{十三}_金 総司令部に宿す。
十八日^{十四}_土 遼陽より營口着。
十九日^{十五}_日 營口発錦州着。
二十日^{十六}_月 山海関着。
二十一日^{十七}_火 北京着。
二十二日^{十八}_水 兵營、服部に如く。夜カルタ会あり。氏家氏来る。
二十三日^{十九}_木 佐伯氏来る。微雪。西村氏来る。
二十三日^{二十}_金 開学に付、訳学に如き、佐伯、稲田、太田氏を訪ふて、午後十時帰る。
二十四日^{二十一}_土 山本に絵葉書を買りに如く。
二十五日^{二十二}_日 小平氏来る。
二十七日^{二十四}_月
二十八日^{二十五}_火
二十九日^{二十六}_水 昨夜小村着、今日来る。

三月

- 一日^{二十六}_木 錦州より外套届く。
二日^{二十七}_金 写真、家書来る。公使館島川氏来談。
三日^{二十八}_土 金氏岳父死去に付、今日不来。近来非常に暖気なり、植木を廊下に出す。
四日^{二十九}_日 月俸受取る。
五日^{三十}_月 牧送別の発句会あり。午後より行く。小村より荷物来る。矢部氏帰りたるよし。
六日^{一日}_日 川田より荷物来る。
七日^{二日}_火 百六十元為替。金曰、道台拳人を買ふには二万両でよし。又秀才は百両位で買えると、又書吏は全国十分の七は浙江人なりと、北京は皆浙江と云

ふ書吏の好き者を継承と云ふ。庚子以前には五年で二十万両位の収入ありしが、目下はそれ程でない。

八日_丑

九日_木 小村、服部、矢部、川田を訪ふ。

十日_金 奉天占領の報あり。

十一日_土 書舗の招きにより、天寿堂にて芝居を見る。

十二日_日 午後より肇の招きにて其宅に如く。

十三日_月

十四日_火

十五日_水 □□□□□□□□

十六日_木 小村来る。鉄嶺占領の報あり。

十七日_金

十八日_土 牧、服部、氏家、坂本を訪ふ。途上巖谷氏に逢ふ。昨日着せりと。矢野氏来る。進士館教習として新来なり。小村より一品肉を貰へり。西太后の贈品なるよし。

十九日_日 日本人会にて奉天祝勝会あり。

二十日_月 今日より七時始業となる。開原占領の報あり。

廿一日_火 肇より律二篇を送り来る。大原送別。

二十二日_水 肇より写真来る。錦州より写真来る。

二十三日_木

二十四日_金 英語教師を訪ひ、隆福寺に遊ぶ。

二十五日_土 雨、家書来る。

二十六日_日 写真。兵營に如く

二十七日_月 服部に見舞に如く。

二十八日_火

二十九日_水 大原奉天に如く。

三十日^{木_{二十五}} 牧氏^曰の留別会あり、餘園に如く。

三十一日^{金_{二十六}} 牧氏を訪ふ、不在。和仁到着。

四月

一日^{土_{二十七}} 高橋氏を新宅に訪ふ。

二日^{日_{二十八}} 射的場にて園遊会あり。

三日^{月_{二十九}} 家書、新聞来る。隆福寺に遊ぶ。

四日^{火_{三十}} 俸給受取。

五日^{水_{月一日}} 百六十元為替す。晴明二付休業。

六日^{木_二} 昨日牧帰国。琴子より梅花の歌三首送りませる。返事。

七日^{金_三} 小村天津より帰り、訪問。

八日^{土_四} 家書来る。稲田、佐伯を訪ふ。

九日^{日_五} 中島裁之を訪ひ、宮村氏を携くて龍泉寺に遊び。別れて黄紹箕の招きにより陶然亭に如く。帰後杉来訪。

十日^{月_六} 坂本来訪。服志げ子まだ十分ならざるよし。

十一日^{火_七} 服氏来る。小村来る。

十二日^{水_八}

十三日^{木_九} 試業始まる。

十四日^{金_十} 試業終り。午後隆福寺に遊ぶ。

十五日^{土_{十一}} 陰。試業中に付、学校に如かず。小村来る。阿部来る。

十六日^{日_{十二}} 杉、坂本二氏来る。

十七日^{月_{十三}} 前門に買物に如く。服部来る。今明両日休業。

十八日^{火_{十四}} 陰、寒。暖炉を用ふ。三月十二日支那の『大公報』に天津の学校と学生との数を挙ぐ、此に抄出す。

大学一、百四十名。中学二、百七十四名。医学校二、七十三名。小学二十一、千六百五十一人。半日小学校十四、千二百二十六人。女子学校五、七十七人な

り。

十九日^{十五}_水 上学。一宮来る。尚寒。

二十日^{十六}_木 又寒。大風。

二十一日^{十七}_金 又寒。大風。本庄に見舞状を出す。露公使レッスナー死去、各公使館半旗、日本不然。

二十二日^{十八}_土 外城延旺廟に如き。女学衛生医院を参観し、琉璃廠にて詩箋を買い、服部に晩食す。小村も来り居れり。大風。露公使の葬式あり。

二十三日^{十九}_日 西田帰省に付、見送りに行き。小村、高橋二氏を訪ひて帰る。前門斎藤よりブドーシュ来る。昨日の『大公報』に保定府学堂を記しあり。其の数二十四。

二十四三四日^{二十}_月 寥氏来る。四川人なり。近々妻を伴ひ母を奉じて日本に如くよしなり。

二十三四五日^{二十一}_火

二十四五六日^{二十二}_水 中西より書籍来る。

二十五六七日^{二十三}_木 雨寒。綿衣を襲す。風邪。

二十六七八日^{二十四}_金

二十七八九日^{二十五}_土

三十日^{二十六}_日 太田、佐伯二氏来る。雨。

五月一日^{二十七}_月 風。

二日^{二十八}_火 風。塩谷手紙来る。

三日^{二十九}_水 月俸受取。佐伯氏と前門に遊ぶ。【眉註：中西屋に為替す。】

四日^{四月一日}_木 服氏来る、坂本氏来る。為替を出す。

五日^{二日}_金 山本氏帰国に付、兵營に如き、麻線胡同の小村新宅に如く。不在。帰寓後、小村来る。又同処に如き、晩飯して帰る。訳学館の張天民三日夜交民巷にて露兵に財布、時計を奪はれ、且毆打されたるよし本日聞けり。公使館よ

り招待状あり。

五六日^三_日 靖国神社大祭に付休む。陰天。

六七日^四_日 伊東家写真と単衣と東京より来る。

七八日^五_日 蘭村来り寓す。林屋来る。

九日^六_日 兵営にて留別会あり。

十日^七_日

十一日^八_日 公使館学務大臣を招き、余も之に日陪けり。

十二日^九_日

十三日^十_日 雨。発句会あり。

十四日^{十一}_日 万寿寺に遊び、帰路阜成門外の教堂に至り。利瑪竇、南懷仁、徐日昇、湯若望の墓に詣づ。

十五日^{十二}_日 川田転寓。ソブランス号沈没の報あり。

十六日^{十三}_日 戒田氏来る。数日前望月、松本二氏来れりと。

十七日^{十四}_日 川田来る。平岡浩来遊のよし。

十八日^{十五}_日 戒田、小村、高橋三氏を訪ふ。

十九日^{十六}_日 矢部氏来る。

二十日^{十七}_日

二十一日^{十八}_日

二十二日^{十九}_日 公主墳に遊ぶ。六時より『順天時報』の招宴に如く。

二十三日^{二十}_日 一宮来る。

二十四日^{二十一}_日 中島真雄帰朝国、見送りに行く。佐伯氏老母、子供、令弟来る。小村来る。

二十五日^{二十二}_日 雨寒。

二十六日^{二十三}_日 家書を得たり。

二十七日^{二十四}_日 休。

二十八日^{二十五}_日 警務学堂、大学の運動会に如く。夜公使の招待会あり。

三十九日

二十九日^{月二十六日} 休。

三十日^{火 雨 二十七日} 服部より福燕寿堂に招かる。

三十一日^{水 陰 二十八日} 肇の祝宴に如く。小村と訳学館に如く。

〔六月〕

一日^{木 雨 二十九日} 公使の招宴に如く。

二日^{金 三十日} 雨。

三日^{土 五月一日} 晴。俸給受取。家書来る。

四日^{日 一日} 雨。

五日^{月 二日} 『九州日報』記者藤参観の為に来る。平岡浩太郎の随員なり。

六日^{火 四日} 為替を出す。矢部、服部、佐伯、岡田、西村、太田、坂本諸氏を歴訪す。【眉註：休校。】

七日^{水 五日} 端午に付休業。午後前門外に散歩す。陰、雨。

八日^{木 六日} 鈴木亮◇◇◇来る。◇◇◇は甘肅の蘭州へ行く途中なり。城上散歩。

九日^{金 七日} 上野岩太郎来る。

十日^{土 八日} 夜大雷雨。家書を得。

十一日^{日 九日} 熱甚。

十二日^{月 十日} 々

十三日^{火 十一日} 々

半三四日^{水 十二日}

十四五日^{木 十三日}

十五六日^{金 十四日} 与倉来る。送りて停車場に至る。発句会あり。

十六七六日^{土 十五日} 家書を得たり。

十七八七日^{日 十六日}

十八九八日^{月 十七日} 服部に招かる。

十九^{大月}二十九^{十七} 黄紹箕来る。

二十一^{大月}_{十八}

二十三^{大月}_{十九} 午後訳学館に如く。服部を経て棠陰精舎に如き、平岡と会す。
夜服部来る。一宿。

二十三^{大月}_{二十} 朝食後帰宅。公使館に如く。学生来る。夜服部来る。

二十三^{大月}_{二十一} 小村来る。夜服部に如く。

二十四^{大月}_{二十二} 教習諸氏出発。

二十五^{大月}_{二十三} 与倉電報来る。

〔以上 第二冊〕

【謝辞】

本資料の調査・翻刻に当たっては、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の方々
よりのご高配を賜り、さらに堀川貴司・高橋智両教授より御教示を頂いてい
る。謹んで感謝の意を表する次第である。

安井小太郎《寓燕日记》解题·翻刻

陳 捷 (CHEN Jie)

本稿是近代日本汉学家安井小太郎的北京日记稿本《寓燕日记》的整理本。

安井小太郎 (1858.7.29~1938.4.2) 字朝康, 号朴堂, 是日本幕末明治初期著名儒者安井息轩的外孙, 明治时代著名汉学家岛田重礼女婿。他青年时代在帝国大学古典科学学习国学, 毕业先后在学习院大学、大东文化学院 (今大东文化大学) 等校任职, 从事汉文、经学及日本汉文学史、日本思想史和中国思想史的教学与研究。

安井小太郎于 1902 年受京师大学堂译学馆聘请担任该校教授, 于 1903 年 4 月从东京出发前往中国, 同年 5 月 3 日到达北京。日本庆应义塾大学附属研究所斯道文库藏有安井小太郎日记稿本《寓燕日记》, 时间起于 1903 年 4 月 5 日从东京出发, 止于 1905 年 6 月 25 日, 除两次回国休假期间没有记载之外, 前后大约两年时间。记录内容包括前往北京时沿途所见、在北京的日常生活、在译学馆工作以及学习汉语的情况、北京的风俗习惯、到北京郊外及山海关和保定等处旅行的经历、与家人和友人通信情况等, 是了解安井小太郎在中国期间生活经历、与清国政府高官及译学馆同事等中国人交往情况、在华日本人的 interpersonal 关系以及当时日中两国教育交流和中国社会状况的重要记录。此外, 本刊第 182 册所载笔者整理的《北马录》作者服部宇之吉在安井小太郎之前已经受聘为京师大学堂总教习, 与夫人繁子携三个孩子住在北京。繁子是安井夫人琴子胞妹, 服部与安井有亲戚关系, 经常在一起行动, 所以本日记中也时时可见服部及其家人在北京生活的记录。安井在中国任教期间正值日俄战争爆发, 其友人、同乡以及在中国认识的一些日本人也前往战场并失去生命。日记对日俄战争爆发前后的传闻、新闻报

道以及在华日本人动向有所记录，对了解当时日本人对日俄战争的态度也具有重要价值。为便于更多读者了解这一珍贵史料，特征得斯道文库同意，将其全文整理公布。由于篇幅限制，本期只发表日记文字的整理稿，关于日记内容及其价值分析，拟另撰文考察论述。

